

# 雷帝の魔本

神風響姫

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

目が覚めると見知らぬ子供になっていた。生まれ変わった少年、デュフオーと、憎しみに囚われた子供、ゼオンの物語。

※毎度のことながら登場人物がイイ具合におかしくなるかと思われませんが、予めご了承ください。

# 目次

遭遇編

プロローグ

1

邂逅編

第一話 魔物の子

19

第二話 実験

34

第三話 キース①

50

第四話 キース②

65

第五話 日々平和

81

第六話 ロツプス

92

間章 心に焼かれて

113

## 遭遇編

### プロローグ

目の前は真っ暗だった。

が、声は出ないし、足元もおぼつかない。落ち着いてみれば、手足の感覚も定かではないし、まるで水中を漂っているかのような感覚が全身を包んでいる。

ははあ、これは夢だな？

寝るときは足の裏が地面についてないから、夢中だと水の中を漂っているような感覚だっていうし。自覚があるのが不思議だけど、まあそういう時だってあるよね、うん。

どっかで見たこと聞いたことある展開な気がしなくもないけど、別に転生トラックに跳ね飛ばされたり気まぐれ殺人犯に斬られりした記憶はないんで。

けどまあ、こんな何もない夢とはつまんないな。

やがて意識がすう、と浮いていく感覚が訪れる。

そろそろ目が覚める頃合か。

しかしやけに眩しいな。誰だよ明かりなんてつけたヤツは――

「博士。少年Dの蘇生治療に成功、意識が回復しました」



その少年を発見したのは、偶然だった。

アメリカの片田舎で噂になっていた天才少年。どんな難題も解き明かし、中学高校どころか、大学の入試問題さえ幼いうちに解き明か

すという、噂にしては聞き慣れすぎたもの。

しかし噂とは必ず出所がある。当時普及されつつあったインターネット上で確認された少年の情報を元に、とある組織に身を置く人物——ドクターと呼ばれる老人は、現地へ趣いた。

そこで見たのは、想像通りの少年だった。

だが、少年の能力は噂以上だった。

たったの七歳、そう、まだ小学校に通う年頃の、物事の善悪さえ定かでない少年でありながら、現代医学では完治することができない難病の医療法を提示し、金銭面から破綻しつつある政府の懐事情を考慮した上で現状の打開策をパターン分けして答えた。

恐ろしい、いや、素晴らしい力だ。

これに目をつけたドクターは、すぐさま母親に交渉を持ちかけた。母親の方も息子を薄気味悪く思っていた様子で、一万ドルというはした金で我が子売り渡した。少年の価値を考えれば破格の値段だが、母親は引き取ってくれるならなんでも良かったのか、それとも目先の金に目がくらんだのか。少年の価値などまったく考慮せず、すぐに手続きを行った。

いずれにせよ、少年の身柄を預かることとなったドクターは、すぐさま研究施設へと少年を移送した。

実験は長期に及んだ。最初は母親のもとへと帰りたがる少年——通称『D』を欺き、実験に協力すれば家に帰すと、適当な約束で半ば無理矢理身を差し出させた。最初は幼い身体ゆえ、薬物投与や肉体および精神へのショックは与えず、書類検査や質疑応答がメインとなった。

やがて少年Dの出した答えにより、数多くの企業が資金援助を行い、それによって新たな施設が設けられた。少年Dは北極の地下施設にて、新たな実験に付き合わされることになる。

この頃から、少年の能力は「答えを出す者」という呼称が定着した。やがてDは反抗心を抱くようになり、実験に非協力的な態度をとるようになった。書類は破り捨て、こちらの質問には無反応。やはりというべきか、兵器開発のために非人道的な実験に付き合わされている

という自覚が芽生え始め、罪悪感も手伝って、こちらの実験に拒絶するようになる。

しかしこれまた予想の範疇、少年Dが口で答えないならば直接頭に聞くまで。ヘッドギア型の機器を装着させ、脳波の変化などから少年Dの反応を感知し、情報を引き出す。いささか効率が落ちるものの、少年Dの脳が活動している間、常に刺激を与え続けることができる。多少の反応の悪さが目立ったが、概ね良好だった。

いつか少年Dの怒りが爆発するときがくるだろう、と誰もが思っていた。

とはいえ。

まさか少年Dが自害するとは思わなかったが。

『まさか自殺するほど意志の強さがあるとは思わなかったね』

まだ幼く死の概念すら危うい年頃、命を絶つことに躊躇いはあつたはずだ。しかしそれ以上に、過酷な環境で実験動物扱いされることに耐えられなかったのだろう。あるいは、自分の力によって得た情報で、大量の殺戮兵器が完成したという事実罪悪感が押し寄せたのか。

ドクターにとって少年のことなど些末事だが、その力は失い難いものである。ゆえに、彼が誤って死なぬよう、細心の注意を払っていたのだが、自殺は考えていなかった。

もともと、自害など想定内の出来事だ。

少年Dの力は唯一無二の存在だ。その価値は到底計り知れないモノ、人間に発展と栄光をもたらし、危険を招き破滅を呼ぶモノだ。使いようによつては人の役立つ物を産み出し、長きにわたつて栄華を約束する。ただの子供が持つには相応しくないが、みすみす手放して良いモノではない。

少年Dがどのような状態に陥つても、通常の状態に戻せるようこの施設には最先端の治療器具が備わっている。これも少年Dによる功績の一つであるが、彼はそれを知らないだろう。

これにより、少年Dは意識を回復。自害による逃避など許さない、彼にはまだまだ人類のために、彼らのために役立つてもらわねばなら

ない。損得勘定によって蘇生された少年には、その価値が失われるまで働いてもらう……決して尽きることなき人間の欲望に、永劫付き合うことになるのだ。

彼の心中は穏やかではないはずだ。ようやく終わらぬ悪夢から逃れられると安らかに眠るはずだった彼を再び呼び覚まし、また監獄の中で苦しみ続けなければならぬ。憎悪、悲観、激怒……いくつもの感情が混ざり合っていることだろう。しかしその感情もまた、「答えを出す者」の力を発揮する動力源。いつか死するその時まで、いや、その価値が失われる瞬間まで、生ける屍として働き続けるのだ。

……そのはずだったのだが。

「おいじいさん。腹が減ったからステーキ食わせろ、肉は神戸和牛なそれ以外は認めない」

少年Dは、椅子の上でふんぞり返っていた。

「……D。生憎だが、ここにはそのようなモノは無い。そもそも君には、その必要が無いのだよ」

「えーないのー？ そっかー食えればすっげえ気分良くなって天才的ひらめきが訪れたりするかもしれないんだけどなー。かーっ、惜しいなー。まーないなら仕方ないかーないんだもんなー」

尊大な口調、不遜な態度。えらく不満げに眉根を寄せ、大きく溜め息をついた。

「君が本調子ではないと思いはある程度は見過ごしていたが、怪我は既に完治しているはずだ。治り次第実験は再開するよ」

「あーやだやだ、ケチなヤツって気分悪くする天才ですわ。美味しい飯をまともに出せないオッサン略してマダオとか存在価値皆無なんすけど」

「……あの、話を聞いているのかい？」

「は？ え、何そのよろしくない返事。誰のお陰で金儲けしてると

思ってるの？ それくらいのことも分からないの？ 馬鹿なの？  
死ぬの？」

「いや、だから」

「うるさい黙れ。あんまりしつこいとあんたが死ぬまでの予想時刻を  
言うぞ、一秒刻みで。あ、今五秒減った」

「……………はあ」

心の底から疲れた様子で、ため息をついた。

復活してからこのかた、少年Dは『まるで普通の少年』のように振  
舞っていた。

少年Dの態度が豹変したことに気づいたのは、助手のミス・グレー  
スだった。元々、少年Dに対し同情的であった彼女を世話係に置くの  
は宜しくないと思っていた矢先、慌てた様子で駆け込んだミス・グ  
レースの表情は記憶に新しい。

なんでも意味不明な言動を繰り返しているとのことで、ひどく狼狽  
していた。特に脳には異常が見られなかったが……………また実験を嫌  
がって何かしたんだろう、と思つたものの、今までとは異なる表情を  
浮かべるミス・グレースの様子に眉根を寄せた。

一体何が起きたんだ。

ほんの少し不安を抱きつつ、ドクターは実験部屋へと足を運んだ。  
防弾ガラス越しに見える少年Dの姿を見て、とりあえず安堵の一息を  
ついた。特に普段と様子は変わらない。やはりミス・グレースの思い  
違いか、と思つた瞬間、少年Dが振り向いた。

そして、

ドクターの顔が強ばった。

少年Dは、笑っていたのだ。

(な……………!?)

一瞬、ドクターの顔から血の気が引いた。

少なからず衝撃を受けたのは、間違いなかった。

彼の置かれた環境や境遇を考えてみれば、分かるはずだ。彼の扱  
いは実験動物のそれと同じであり、非人道的な実験を繰り返してきた。



怒りや憎しみを抱いた時に最も能力が正確性を増すことから、彼の大事にしていたペットを殺したこともある。さらには少年の意志を無視して自殺を防ぎ蘇生処理を施した。恨む理由は十分すぎた。

だというのに、

少年Dは笑っていた。

口の端を釣り上げ、意地の悪そうな笑みを浮かべていたのだ。

加えて、今のこの状況。最早別人に成り代わったと言っても過言ではない豹変ぶりを見せた少年D。

一体、どういうことだ？

何が起きたというのだ？



いやあ、「答えを出す者」便利だわあ。さすが原作屈指のチート能力。二次創作じゃ滅多に見かけないけど、使ってみるとその異常な汎用性にビツクリ。

この能力はあくまで『答えを出す』ことに限定されてるから、自分の肉体の限度を超える答えや現実的に不可能な答えを導き出すことはしない。あくまで自分が出来そうな範囲内の理想の答えを即座に導き出せる、というもの。しかし引き出しの多さというか、可能性の無限性は驚異的だ。

例えば空を飛べるにはどうしたら、と考えれば、飛行機に乗ればいいという常識的な解答よりも早く、自力で飛行する手段が出る。今の人類では完成できない技術をふんだんに使い、ともすれば世界の常識が転覆しかねないほど脅威の論理をもって。

「答え」は柔軟性に富んでいる。今最も欲しい事実、理想的な答え、人に無理ではない範囲での解答。それらは全て、一瞬の思考の猶予さえ与えてくれれば、何だって「答え」が出てしまう。

この能力の恐ろしいところは、『自分が知らない情報も引き出せる』

ということだ。かつて原作のデュフオーが不完全な状態で世界最高峰の難問を平然と説き伏せたのは、「答えを出す者」の力で、問いに対する最高の答えを『出した』からだ。

つまり「答えを出す者」とは、考えただけで何事であろうと最善にして理想の答えを瞬時に叩き出せる、という能力。

まあ、それを使わずとも、自分の現状を把握するのは簡単なことだった。

俺は『デュフオー』になった。ガツシユの世界、漫画の世界に存在するキャラクターの一人として、生まれ変わった。

つまりはそういうことだった。

憑依とか異世界転生とか、疑問に対して色々考えられることはあるけど、この答えは「答えを知る者」をもってしても分からなかった。能力にムラがあるから、というより、「答えを知る者」にだって分からないことは分からない、ということだろう。古代の文字すら解読するこの力だって、異世界に行く手段なんて用意できないし、記憶を持ったまま生まれ変わる方法なんてどう足掻いても無理だと判断してしまうからだ。

そもそもこの力からして非常に曖昧だ。何でも答えられる、という謳い文句に反して、デュフオーはゼオンの心境の変化の原因を突き止めることができず、己の中にある未知の感情が何なのか理解できなかった。

万能である「答えを知る者」だが、全知全能じゃない。この世すべての謎を完全に解き明かすことなんて、人の身では不可能。俺の出した最終結論は、これだった。

聞けばデュフオーは、実験途中で自殺を図ったらしい。非道な実験を受けているという現実と、兵器開発に加担しているという罪悪感に押しつぶされたせいだ。それは「答えを知る者」なんて使わなくても、なんとなく察した。

当時、デュフォーはまだ子供だった。人間の薄汚さ、外道さを理解しきれない年頃から研究所に押し込められ、長い年月の間に憎悪と激怒を溜め込んでいた。辛かっただろうに、よく何年も耐えたものだ。

だが自殺は未遂に終わった。デュフォー自身が提供した情報によって完成した技術によって。

結果、デュフォーは望まぬ蘇生を果たしたわけだが、どういうわけか、中身は違う人間のものとなっていた。

しかし、不思議だなあ。この力があれば、脱出する方法の一つや二つ、簡単に思いついただろうに。現に俺の頭の中には、外への脱出するルートが幾つも浮かんでいる。通信機器があり、背後の組織から多大な資金を受け取っているという推論が正しければ、人間が来れる場所である以上、必ず逃げ出せる。そう確信してしまえるだけの力があるんだ。

……いや。

デュフォーはきつと気づいていたはずだ。未熟な状態でここから出ても、以前のように人間社会に溶け込んで生きていける術などない、ということ。

「答えを出す者」の力は強力無比、本来人間が持つには不相応な力だ。どんな難問も瞬時に解くことができる、人類にとって最高の力。それだけの力を持つ男が、普通の人間の中に混じって、普通の生活を送れるかなどという簡単な疑問に、答えを出せないはずがない。

実験に付き合うことに嫌気が差しつつも、外の世界では決して受け入れられることがないと悟り、どうすることもできず、絶望のまま死に絶えたデュフォー。

まあ。

それも今となっては、終わってしまった話なわけだが。

「おい腐れジジイ、飯はまだか」

『ついさっき食べたばかりだろう?』

「は? うわ出たーそうやってまるで記憶力が低下した老人を欺くクソ外道ヤツー。頭酷使してんだからカロリー消費して腹減るの当たり前じゃん、常識よ常識。あーでもやっぱ糖分欲しいなー糖分。やっぱ飯はいらんからチョコレートくれよチョコレートホワイトならなお良し。さあとつとと寄越せはよ寄越せ、さもなくばお前の頭を焼き畑農業すんぞ」

ドクターといかいう、責任者らしきじいさんは困った顔をしている。そりやそうだろうな。

俺はというと、他人の肉体に入り込んだせいか、「答えを出す者」を持っていてのことに対しそこまで違和感がないし、人間離れた力を所持していることに嫌悪感を抱いてもいないし。まだ日が浅いからとか理由は色々あるんだろうけど、今のところ問題はない。

どちらかという問題なのは、肉体がまだ幼い以上、俺は無理をできないということ。所詮身寄りが無い子供、外に出たところで生き長らえる手段は限られてくる。

だから、少なくとも青年期……原作デュフォーと同程度の歳になるまで、ここにいる必要がある。ある程度協力的な姿勢をとつていれば、向こうはこつちに危害を加えることなんてないし、衣食住も最低限保証してくれる。

挑発的な行動は、度が過ぎないように意識はしている。あまりに目に余ると今後の待遇に影響が出る。それはマズい。

今はここで、望まない境遇を甘んじて受け入れよう。

死にたくない。

ただその一心で、俺は生きる。他人の身体を使つてでも。

しばらくは適当に生活しながら、様子を見よう。いつか事態が急変する時が来る。

——魔物の子たちが、人間世界に降り立つその時まで。



「ほう。もう研究には協力しないと、そう言うのかね？」

少年Dの豹変から数年後。

ドクターはモニター越しに、少年の決意を受け取った。

既に少年Dの能力も、間もなく円熟期に達そうとしている。それに伴い、少年も青年期に達していた。顔つきは精悍なものになり、体つきも成人男性のそれと比較しても遜色ない。体を鍛えたいという少年Dの申し出を断らなかつたドクターは、実験に差し支えない範囲であればという条件の元、簡単な運動やトレーニングは許可していた。

自画未遂の一件から、少年Dに怒りや憎しみを抱かせるよう実験を試みても、以前ほど能力のムラは見られなくなった。強い怒りや憎しみを抱かせた時、少年Dの能力は最大限発揮されたのは、過去のデータからしても明らかだ。だがその後は芳しい結果が得られず、逆に良い数値が出ないことが連続した。

そこで方針を変え、あえて少年Dが喜ぶような実験を試したところ、値が最大を示した。ドクターの中で推論が確信に至った瞬間だった。

少年Dの変化は、能力にまで及んでいる。

死したことで能力に変化が生じたのは、疑いようもない事実だった。

少年Dの態度が横柄なのは、この際無視することにした。蘇ってからの少年Dは、実験には差ほど興味がなくなり、割とすんなりこちらの実験に付き合っていた。不機嫌になるのは彼の要望や言動を無視した時のみで、ある程度叶えられる要求に応えれば、彼は機嫌よく力を発揮した。理不尽すぎる要望は応えなくても機嫌はそこまで悪くなかつたので看過した、というのが実情である。

後で「ひよつとして我々は少年Dに振り回されてね？」と疑問に思

い、本国の上層部へ意見書を陳情したが、成果は上がっているため「オメエの事情なんてしらねーよカス」と唾棄された。いつだってお上は下っ端のことを考えてはくれない。

だが、それもここまでだと、少年Dは豹変してから初めて、反抗的な態度をとった。

『ああ、そうだ。もう俺は十分アンタらに尽くしただろ？ 十分な利益を得たはずだ。どれだけ医療や軍事に貢献したか知る由もないが、数億ドルでは物足りないほどの価値あるモノを生み出した。もういいだろ？ 俺をここから開放してもらいたい』

久方ぶりを見る、喜び以外の感情的な目線。

この男にも負の感情が、人間らしい部分がまだ他にあったんだな。あの一件以後まったく見られなくなった少年Dの鋭い眼光に、ドクターは妙な安堵を得た。

(だが……)

馬鹿が、とドクターはモニター越しに薄笑いした。能力が不十分な状況でも多大な成果を残した少年Dの力。それが円熟期に達した今、彼の出す「答え」は正確無比だ。どんな問いにも即座に答えを導き出せる。例え稀代の天才たちがサジを投げた難問であろうとも。

ゆえに

(やはり危険だ。今のうちに破棄するべきだろう)

今日、ドクターが告げようとしたのも、そのことが関係している。彼を危険視する声が高まってきている現状、早期段階に破棄し、証拠を全て隠滅する。勿論反対する声も上がっているが、現場の最高責任者たるドクターこそが、賛成派の筆頭である以上、彼の決定が全てだ。

起爆装置の起動は簡単だ。今手元にあるボタン一つで、施設に用意された爆弾のスイッチが起動する。ひと度起動すれば解除することはかなわず、ドクターらが行っていた所業の証拠全ては灰燼と帰す。一研究者に過ぎないドクターも充分美味い蜜は吸った、後は残りの人生をゆつくり楽しむだけである。

さらばだD、君はよく働いてくれた。豹変した君には少々驚かされ

だが、まるで人が変わったようで見えてなかなか興味深かったよ。  
対話は終わりだとばかりに、薄気味悪い笑みを浮かべたまま押し黙ったドクターは、通信を切ろうとした。後は爆破する手筈を整えれば良い。その際にも色々な仕掛けを用意せねば。

と。

その時、少年Dが制するように言った。

『爆弾か。随分と芸がない』

「――、」

下へ向けていた意識を戻す。すると、相も変わらず、見透かしたような目をした少年Dの顔があった。

（「答えを知る者」か？ いや、だが……）

だからなんだというのか。言い当てられたところで向こうにはどうしようもない。力はあっても手段はないのだ。ドクターの判断一つで数分後には命が消える状況であることは、聡い少年Dならば感づける範疇だろうに。

依然として。

Dの態度は平常のままだ。

どころか、最早見慣れた挑発的な言葉を叩きつけてくる。

『ここを爆破するのは、貴方の独断か。成程、他の連中も危惧しているのか……それとも強硬派の独断専行か？ いや、今まで現状維持ばかりで遂に痺れを切らした、といった感じではなさそうだ。ああ、それにしてはお粗末じゃないか？』

「……今日は随分とおしゃべりだね、D」

ドクターの額に汗が浮かび出す。

少年Dの発言内容は半ば脈絡がない。何故なら、彼は話しながら「答えを出す者」を使い、僅かな情報から疑問に対する答えを自力で導き出している。こうしている間にも、ドクターの言動から数々の情報を引き出し、頭の中で答えに到達していることだろう。

『通信を切っても時間の無駄じゃないか？』

「……何故そう思うんだね？ D」

『ここにある程度の機器が揃っている以上、そちらにコンタクトをと

る手段などいくらでもある。違うか?』

「君にしては的はずれな見解だね、D。無理だよ、何故なら——」

『そんなことができるのか、だって?』

Dは見下すように鼻を鳴らした。

『確かにこの通信器具や設備を用いたところで、やれることなど限られる。だが僕がここにいる以上、あなたは僕に干渉する理由はある。それだけの値打ちが僕にある。何故なら世界に一つしかない能力を、こんな無力な子供が所持している。膨大な予算を組んでも組織は僕を見逃さない、簡単に手放すには惜しい。僅かな危険を度外視しても利益を追求する理由はある。そうだろう? でなければ僕がここまで自由に生かされている理由がない』

「……………」

ドクターは無言で、通信を切るよう手を動かす。少年からは決して見えない位置にあるパネルへ、音もなく指を這わせた。

しかしやはりと言うべきか、少年Dは鋭く察した。

『通信を切つても無駄だよ。これだけの施設だ、そちらが永劫通信を絶つても、僕なら再びパイプを繋げる。こちらから干渉する用意は十分にある。例え『孤立した厳しい大自然の中』にこの研究所があったとしても、辿り着けないと断言できるか? 海の中で呼吸ができないから水中を長時間泳ぐことはできない、翼がないから自由に空を飛べない。さんざん不可能と言われた困難を乗り越えてきた人類は、長い年月と数々の閃きをもって乗り越えたんだ。

分かるか? 『たかが天才』である彼ら人類の祖先にできて、今の僕にできないことはない』

無言を貫くドクターの手に、じわりと汗が滲み出す。

視線を移す。その先にあるのは、カバーに覆われた赤いスイッチ。パネルだらけの中で、一際異彩を放つそれ。

起爆装置だ。

いつか少年Dの力が円熟期に達する。その時、無力な研究者らでは対抗することなどできない。人智を超える力を持った『化物』の前では、どんな人間だろうと有象無象、チリに等しい存在でしかない。



しかし、どんなに人間離れた力を持っていようと、元は人の子。木の股から生まれたわけではない。肌を切り裂けば血を流すし、頭を吹き飛ばせば死ぬ。

このボタン一つで、少年Dの減らず口を閉ざせる。簡単な作業だ。(いつそここの場で爆破してしまおうべきか……?)

だがドクターの出鼻を挫くかのように、タイミング良く少年は言った。

『負け惜しみだと思ukai? ならばこれだけは覚えておけ。もしあなたが僕を放棄すると決意した時。その時が——あなたの敗北だよ、ドクター』

指の動きが完全に止まる。

何故かは分からない。ドクターも己の行動に不審を抱くが、それは裏腹に、身体の動きは完全に凍りついたままだった。

モニターの中で、少年Dは薄く笑う。

それがどうにも、悪鬼羅刹の嗤う顔に見えて仕方がなかった。

無論、ドクターは少年Dの発言がハツタリだと見抜いている。

所詮は理屈をこねただけ、具体性を欠く虚言でしかない。全ては『かもしれない』という可能性を提示しただけで、少年Dは「答えを出す者」の力を除けば、ただの無力な一少年でしかない。大自然には敵わず、人間の限界という壁には抗えず、孤立無援の要塞の中で、孤独なまま死んでいくしかできない。

けれども、それでも。

ドクターの表情は終始堅いままだった。

不可能を可能にする。少年Dの発言は、全てが嘘というわけではない。なまじ頭が良いだけに頭ごなしに否定することもできず、ドクターは少年Dによって不安と恐怖を大いに煽られた。

ボタンを押せ、そうすればこの男は死ぬ。

だが、本当に死ぬのか?

いつか自分が破棄される日が来る、それを予期できなかったと言えるか?

既に対策を練り、施設の発破を妨害する手はずを整えているのでは

ないのか？

指先が震えだす。最早進むこともできず、引くこともできない。流れ出す滝のような冷や汗を悟られまいと、半ば無理矢理通信を遮断するのが精一杯だった。

切断するや否や、肩で息をするドクター。吹き出した汗が止まらず、手が小刻みに震えている。一体何故、どうしてという思いが、胸中で複雑な渦を生じさせる。

あれ以上直視していたら、間違いなく頭がどうにかなっていた。

数年前、自害を試みる前までの少年に対してなら、こうも不安を抱くことはなかった。

だが現実はどうだ？

まだ二十にも満たない若造が、あれほどの堂々と振る舞い、モニター越しにも伝わる不気味な威圧を放てるものか？

あの死が。自害したことが、彼にまだ残されていた潜在能力を引き出したということなのか？ あの精神的余裕、この無意識に放つ威圧感。そうだとすれば納得もいく。

人は死から蘇ると、奇跡のような力を授かるという。おとぎ話や伝承の類だと思っていたが、実際目にしてみると、そうとしか考えられない。

(殺すか、それとも殺さぬのか……)

それは、己の独断。少年Dの危険性を間近で確認できたからこそ至れる思考。本国で利益という甘い汁をすすっている連中には決して予想し得ない事態。

僅かな危険の芽が、今ここで急激に背を伸ばし、花を咲かせようとしている。やがて姿を現す実りは爆弾となって投下される。異能の力を持たないただの人間であっても、本能的な部分が危険信号を鳴らしている。決して看過して良い問題ではない。

それらはすべて、根拠のないドクターの妄言と一蹴されるかもしれない。ただドクターには、少年Dがこのままで終わるはずがないだろうという、妙な不安に取り憑かれ、その場をあとにしても、薄気味悪い笑みを浮かべたDの顔が頭から離れなかった。

かもしれない、という不確かな理由。  
それだけで、人はこんなにも不信になれる。

それは、戦争と同じ理屈だ。



二日後。

何の知らせもなく、何の前触れもなく、研究所の放棄が決行された。中には国家予算数十年分にも匹敵する資材や貴重なデータが残されてはいたが、それら一切を自爆装置による抹消が断行される運びとなった。

表向きの理由は、「答えを出す者」の力が解き放たれ、自分らの非道が公にならないことを恐れていたからだろうが、真の理由は、短期間に少年Dが予想以上に成長したためだった。

彼は危険だ。

いずれ我々の元へ辿り着き、刃を突き立てる時が来る。予期していた事態が予想よりも早く到来してしまったのだと、現場の最高責任者だった老人は、ひどく焦燥した様子でそう述べた。

だからこそ、手放し難い垂涎の品だろうと、自らの手で破壊する必要がある。

「D」と呼ばれた少年は、大自然の脅威の前に為す術はない。北極という厳しい自然の要塞の中では生き長らえる可能性は皆無。施設内部には防寒設備が整っていたが、それらはすぐにでも爆炎となって消滅してしまう。薄い普段着しか寒さを防ぐ手段がない少年Dは、抗うことも適わず消えてなくなる。生きていた証拠も、何かを成し遂げた痕跡も、全ては無かったことにされる。

——かくして、施設の爆破は何の滞りもなく決行された。北極の

大地の上に立っていた小さな建物は、地下に眠る広大な施設共々、突然の爆発によって炎上し、寒空の下で炎華を咲かせた。

付近には人影は見当たらず、誰かが逃亡した形跡は見当たらなかったという――

現実とは酷なものだ。どれだけ理屈を並べようと、どれだけ人間が進化しようとも、自然の摂理の前では無力。たった一人の人間の命は数十億のうちの一つでしかなく、一人の人生は数十億年の中の一瞬でしかない。

どれほど人間を超越した力を持つとも、

やはりそれは、人間なのだ。

人間、一人ではできないこともある。人を超越しすぎたがゆえに、少年Dはそれを今ここで思い知らされる。それだけの話なのだ。

――そう。

一人だけなら。

少年は目を覚ます。ヘッドの上で寝転んでいたはずだったが、凍てつくような寒さで意識を取り戻した。

周囲は瓦礫の山であり、ところどころで赤い影が揺らめいている。施設があったと思しき場所は、跡形もないほどに破壊されていた。

何が起きたのかと、少年が考えるよりも前に。

少年の眼前に、何かが落ちた。  
象形文字が描かれた、一冊の本。  
そして、  
その後ろには。

「お前、その本を読んでみろ」

荒れ狂う猛吹雪の中。

子供が一人、立っている。

紫電の眼光を鋭く飛ばし、周囲の世界に溶け込む白銀の髪を揺らす、憎悪と激怒の化身のような、そんな子供が。

## 邂逅編

### 第一話 魔物の子



「貴様、どういうことだ!?!」

早朝。

欧州某所にて。

朝の穏やかな空気を引き裂く、落雷のような怒声が響き渡った。

「いきなりどうした、ゼオン」

青年、そう、先日ゼオンが救った青年は、無表情に視線を返す。その間にもフライパンを揺らす手は止めず、たまごが全体に行き渡るよう動かしている。既に焼きあがったベーコンは、皿の上で相方の登場を今か今かと待ちわびている。

いわゆる朝の台所風景であった。

何を怒っているんだ、とでも言いたげな青年の目。それがゼオンの琴線を余計に刺激した。

「あれから数日が経った! 環境の変化に適應するためと思い一日猶豫を与えはした。だがオレは最初に説明したはずだ! 我ら魔物の子100体による、魔界の王を決める戦い! それは既に始まっているのだと!」

「ああ」

青年は小さく頷く。その顔には動揺一つさえ感じ取れず、感情の波さえ伺えない目がある。出会った時からそうだった、人間として、生物として、何かを欠いているようにしか見えない姿。

出会った当初、ゼオンは、ちょうど良い相方だと思った。無駄に感情豊かな人間では、激しい戦いの中で無駄な善悪感情を働かせ、戦いを危惧し忌避するようになる。戦争がほとんど途絶えた現代社会の

中で、互いに傷つけあうことを良しとする人間は少ない。そういう意味では、おあつらえ向きなヤツだとさえ考えていた。

そう、戦い——魔界の王を決める戦いだ。

人間の住まう世界とは別次元に存在する世界、魔界。そこでは千年に一度、魔界の王を決めるため、選抜された100人の魔物の子が人間世界へと送り込まれる。雷の力、重力の力、癒しの力……それぞれ属性は異なり、実力や素質は千差万別だが、いずれも、人間より優れた力を持つ者ばかりだ。

魔物の子は魔界の王となる権利を、魔本と呼ばれる一冊の本とともに授かる。これこそが力の源であり、力を行使する唯一無二の術である。中には魔界の文字とは異なる特殊な文字が書かれてあり、あるきっかけが訪れると、文字が光り輝いて、読めるようになる。その文字を読むことで、初めて魔物が持つ力を、術という形で発揮できるのである。

しかしそれには条件がある。それは、魔物の子と共に戦う、人間のパートナーの存在だ。

王を決める戦いでは、必ず人間一人と組んで戦うことになる。組んだ人間——パートナーは、魔物の子が持つ魔本、そこに描かれた文字を、唯一読むことができる。パートナーが呪文を唱えた時、術の力は正しく発揮される。

このパートナーは完全にランダムで決められる。世界各地に散らばった魔物の子たちは、それぞれ異なる手段を用いて、パートナーを探し当てる。大体はパートナーとなりうる存在の近くに転送されてくるのだが、たまに例外もある。

魔物の子は、パートナーとなる人間とタッグを組み、やがて衝突するのであろう他の魔界の王候補者を倒す。権力の証である魔本は、術などで燃やされた場合、消滅する。それに伴い、人間界に来ていた魔物も自動的に魔界へ送還される。いわばこの戦いは、純粋なサバイバルレースなのだ。

そして最後の一体となるまで生き残った者。それが次の魔界の王となる。

この魔物の力、術の力は、使いようによっては、人間世界に無用な混乱を起こしかねない力ともなる。人間には到底持ち得ない超能力じみた力を、魔物の子たちは例外なく所持している。それを無闇やたらに振るえば、どれだけの悪影響を及ぼすのか、考えるだけでも恐ろしい。

しかし、そんな人間の都合など、ゼオンにはどうでも良かった。

「戦いをするには、まずは強くならねばならん！ 最悪なことに、魔界にいた頃使えた力も、今では術という形で封印されている始末……術の力が目覚めねば話にならん！ そのためにはオレだけではない、貴様も強くなる必要がある！ 人間がパートナーに選ばれた以上、争いは避けられない！ それくらいは承知しているはずだ！」

——だというのに、貴様は何をしているんだ！」

「たまごを焼いてるんだが」

「そうじゃないッ！」

ガン！ と拳が机を強かに打ち鳴らした。すると、焦げたような匂いが漂った。

フライパンの卵が焦げているわけではない。ゼオンが無意識に放つ電撃をまとった拳が、机を焼いていた。術を使わずとも、ある程度は魔物の子として本来持つ力を使える。だがそれも、ある程度の範疇におさまってしまう。本来持つ強力な雷の力を振るうには、どうしても、人間の助力が必要なのだ。

デュフォーは焼かれた机をじっと見つめている。ただそれだけだ。ややあつてからゼオンへと無感動な目を向ける。怯えた様子どころか、感情の一切が伺えない。常人ならば、まるで人形と対面しているかのような錯覚を得られるだろう。

その様子がまた、ゼオンをたまらなく刺激する。

青年の事情は知っている。異能の力が発見され、施設にて秘密裏に能力拡張実験を受けていた子供。人間の果てなき欲望に振り回され、人生を台無しにされたという、悲劇の少年。その過去は如何に人間が俗物であるかを物語っており、実験の最中に少年が抱いた感情は、想



像を絶するものだろう。

人間全てに憎悪を抱いてもおかしくはないほど、少年はそれなりに過酷な人生を送ってきたはずだ。

だというのに、

「だというのに、復讐する気もなくば怒りを見せる気配もない！ わざわざオレが手を貸してやると言っても右から左、自由な生活を送れるようになったら、そこらへんの人間とまったく同じ生活でも良いなどどぬかしやがる！ お前は今まで一体何を感じてきたんだ!? 身勝手な都合を押し付けてきた他の人間が憎いと一度も思わなかったのか！」

いや、とゼオンは一度言葉を切った。

「貴様のことなど、どうでもいい……。貴様が生きようが死のうがオレにはどうでもいい話だが、パートナーである貴様には是が非でも生きてもらわねばならん！ この戦いでオレは勝ち残る！ 本来オレが受け継ぐべき術『バオウ』を奪った憎き弟・ガツシユに地獄を見せた上で叩き潰し、オレは魔界の王となる！ それは決定事項だ！ だがム力つくことに、この戦いでは人間の力を借りねえと力を振るうことができない！ 満足な力を発揮することができない！ オレが勝つには、貴様の手を借りねばならん！」

魔物の子が持つ力は強大だ。しかしその力には制限が課せられている。パートナーとなる人間が戦う意志を持たねば、まったくの宝の持ち腐れ。

何故だ、とゼオンは思う。

それだけの力がありながら、どうして振るおうとしない。あれだけの辛い境遇にありながら、どうして憎しみを抱かない。

こいつは――

「答えろ、デュフォー！ 貴様はオレの味方となるか！ それとも敵となるか!? どっちだッ！」

――こいつは、俺と同じじゃなかったのか？

● ● ●

ゼオンが自分を——デュフォーを助けに入ることには知っていた。それが情ゆえの行動ではなく、せつかく見つけたパートナーを死なせるわけにはいかないという利己的な理由だが、そんなのはどうでも良かった。

自分を利用するため。今まで見てきた研究者と同じ理由ではある。それが失い難い異能者だからか、魔物のパートナーだからか、その程度の差でしかない。

それでも、俺は感謝していた。

世界でたった一人だけのまま、誰にも知られないまま、雪に埋もれて死んでいかずに済んだ。それはゼオンのおかげだ。

起爆装置で吹き飛ばす前に助けしてくれると知ってはいても、万が一助けてくれなかったら、そう思うと、恐怖が体を震わせた。怖くてしようがなかった。研究所にいた時に何度も思った。『俺』というイレギュラーがあるから、ゼオンの行動にも変化が生じているかもしれない。そうしたら、もしかしたら、ゼオンは俺を救わないかもしれない。何度も何度も頭の中で最悪のパターンを想定した。その答えは「答えを出す者」をもってしても解き明かせない、未来の出来事だった。

だからこそ、ゼオンの出現に、俺は救われた。

そのことは、とても嬉しい。

どんなに自分に言い聞かせても、所詮俺は紛い物。他人の体に宿る偽りの命ではない。考えようによつてはただの感傷ではないけれども、空想上の存在とはいえ、誰かの肉体を横取りしたという事実は、ひどく重くのしかかった。

誰にも話せない事実。ゆえに、他者に自分を肯定してもらおうことなどできず、自分さえも己を肯定することができない。

だから、

助けてくれたことに、俺は心底感謝している。

自分に価値があるんだって、そう言われた気がするから。  
ただ、

(そっか。まだゼオンは、ガツシユのことを憎んでいるんだっただな……)

ゼオンは弟であるガツシユが王の住まう城から離れた後、どんな生活を送っていたかを知らない。ガツシユは育ての親であるユノに奴隷のような扱いを受け、虐待のような待遇の中で育った。過酷すぎる環境下で、彼にとって唯一希望だった、見も知らなかった本当の母と父、そして、兄の存在。

ゼオンとガツシユ。現魔界の王の息子であり、強い雷の力を授かって生を受けた双生児。

ゼオンは負の感情の影響を受けやすいがため、王の監視下に置かれ、己の感情に屈せぬよう厳しい訓練を課せられ。ガツシユは王の手に余るバオウの力を秘めたまま、決して目覚めさせぬようにという願いを託され、一般家庭に送られた。

どちらもお互いのことを深く知らず、事情も分からぬまま、幼少期を過ごした。そのせいで、ゼオンは弟に対し強い憎悪を抱いてしまった。自分が辛い目に遭うのはガツシユのせいだと思い込み、いつか必ず地獄を見せてやると決心してしまう。人間界に降り立って、まだパートナーのいないガツシユを強襲し、記憶を奪い、ファワードを用いて世界を滅茶苦茶にしようと目論んだ。

今の彼にあるのは復讐心だけ。立ち塞がる壁を破壊し、群がる敵を粉碎し、王の座に立つ。全てはバオウを奪い、平和な場所でのうのと生きておきながら、日々訓練を課せられ虐待同然の境遇で生きたゼオンと同じ、魔界の王の候補者として選ばれた、ガツシユへの復讐のためであり、それがゼオンにとって唯一の目的だった。

そのことが、とても悲しい。

きっと昔の、原作のデュフオーのままなら。同じ憎悪と激怒に駆られた身、同じ感情で生きている者同士、気が合ったからこそ協力する気になったんだ。行くあてがなく、生きる希望もない彼が唯一気を許せた人物。

けれど、今ここにいるデュフオーは違う。その身に異なる魂を宿し

た別人である。

「どうした!? だんまりでは何も分からんぞー!」

考えにふける俺に苛立ちを更に募らせたゼオンの怒声。

彼と出会って一週間。行動を共にすることで、大まかな性格は把握できた。漫画では上辺っ面しか理解できなかったからこそ、戦いに時間を割かず相互理解を深めようかとのんきに思ってたんだけど、逆効果だったらしい。

そもそも、なんでそんなにキレているんだろう。

俺は戦いたくないなんて一言も口にしていないし、ゼオンの事情も深く受け止めている。家庭事情やら過去やらまで話してくれるほど仲良しではないので、あくまで王を決める戦いに関して聞かされただけが、王になることに執着していることは分かっている。

だから最初は事前準備を整えようと提案し、彼も一応承諾してくれていたのだが……

(ひよっとして……)

ゼオンは、デュフォーに自分自身の過去の姿を投影しているんじゃないだろうか？

理不尽な仕打ちに絶望し、不条理な現状に怒りを灯し、人生を歪められた存在。それはデュフォーも同じこと。魔物とパートナーは相性の良い者同士というが、成程、分からなくもない。

この身体は、本来の俺のものじゃない。だから他人事のような感想しか抱けない。だって本当に他人で、ここは俺が元々いたところとは違う世界のお話なんだから——我ながら、ずるい逃げ口上である。(だけど)

他人の肉体を横取りしている現状に対し、何か思わないわけでもない。けれども、俺がここにいるのにはきつと意味がある。

それはきつと、——ゼオンを王に導くため。

最後には和解できたものの、憎悪に身を委ねたまま多くの者に不幸を撒き散らした彼を救う。

かつてのデュフォーには成し得なかったことを、俺がやる。そのために、俺という存在が、ここに送られたのではないだろうか。

ただの妄想、自分勝手な解釈。「答えを出す者」の力でも答えようがない、俺自身の最大の謎。

でも、もしかしたら。

この魔界の王を決める戦いの中で、俺が何故ここに来たのかが、分かるかもしれない。

デュフォーは一度死んだ。その事実は決して覆らない。

今は俺しかいない。その現実決して変えられない。

ならば、

(俺が、どうにかするしかない)

今ここにいる理由。そうなるに至った原因。これからどうすべきか。全ては俺のこれからの働きにかかっている。

ゼオン。

お前は『俺』を知らない。俺もまだ、本当の意味でお前を知らない。だから、これからは。パートナーとして、一人間として。お前と共に生きてみるよ。まだまだ分からないことばかりでも、辛いことばかりで泣いてばかりだったけれども。いつか必ず、笑えるようになるはずだ。

——それが、『俺』を救ってくれた『少年』への、せめてもの恩返しというものだろう。

「ゼオン」

「なんだ」

手から稲妻を放ち、紫電を瞬かせるゼオン。その瞳にあるのは、ガツシユへの復讐を遂げ、屈辱を与えバオウを打倒した上で魔界の王になるという、強い負の感情だけ。そこに果たして、パートナーに対する怒り以外の感情はあるのだろうか。

それをこれから築き上げていかねばならない。人間と魔物の子、本来あるべき姿。協力し合い、信頼し合い、共に支え合う良き関係。そう。だから、

「今からツボを押す。ちよつと後ろを向け」

空気が凍った。

「……………は？」

ゼオンは元々丸い眼をさらに丸めた。さすがのゼオンも想定外だったようで、年相応の顔を覗かせている。ちよつと可愛いと思つた。不覚。

「お前が魔界の王になりたいという理由は分かつた。ガツシユとかいうヤツに復讐したいという理由も承知した。だが、今のままで勝てると思うのか？」

「貴様……………！ このオレがあんな落ちこぼれ如きに遅れを取るとでも言うのか!?!」

「いや。しかしその『バオウ』とやらの敗北する可能性はあるだろう」  
「……………ッ！」

言葉に詰まる。

ゼオンはガツシユを無力な落ちこぼれと見なしている。それはあながち間違いではない。厳しい訓練を課されたゼオンと、一般家庭で育つたガツシユ。彼我の優劣など火を見るより明らかだ。

しかし、バオウを掠め取つたと思われているガツシユ自身はともかく、バオウそのものの力をまったく考慮していない。元はバオウ・ザ

ケルガを継承するのは自分こそ相応しいと考えていたゼオンだ、頭の隅にくらいなら、考えていただろう。

だが、長い年月の中で復讐心が冷静さと並び立つほど大きくなり、魔界の王を決める戦いにガツシユが抜擢されたという事実が、勢いを弱めていた激情に引火した。彼の目には憎きガツシユへの復讐のみが映っている。

バオウの恐ろしさ。その強さを、ガツシユ以上に理解しているからこそ、彼は強い執着を見せている。

「ゼオン。確かにお前の力は他の魔物と比較しても遜色ないものだ。だが『バオウ』とやらは、魔界を統治する王が全盛期において、無類の力を発揮したほどの脅威なんだろう？ それをちっほけな子供が所持している。危険な話だと思わないか？ それが誰かに向けられた時、向けられた者がどうなるか、考えたことはないか？」

「ぐ……ッ！」

ぐうの音も出ないとはこのことか、ゼオンは言葉が出ない。やはり見落としていただけで、承知していたはずなのだ。

バオウこそ、現在の魔界の王が、激しい戦いの中で勝利の栄光を掴み取れた、力の象徴。その力は絶大であり、それこそゼオンが欲するもの。原作において最高位の術「シン」と同等以上の威力を誇る、全力のバオウ・ザケルガ。それを手にするには、今はまだ、足りないものが多すぎる。

「まずは力をつけろ、ゼオン。そして考えろ。お前の力はガツシユに決して劣っていない。しかしバオウを手に入れるには足りないものがあるはずだ。まずはそれを手に入れろ、そうすればお前に立ち塞がるものなど何もないだろう」

……我ながら言いくるめている感がひどい。基礎能力からして雲泥の差のゼオンとガツシユでは、下級呪文の「ザケル」しか使えない今でも、戦えばゼオンが圧勝するだろうに。というか、時期的にガツシユはまだパートナーである清磨と出会ってない。バオウ使うどころか呪文唱えられねーよ。

もつとも、ゼオンとしては、ガツシユに自分以上の辛い目に遭わせ

てから魔本を燃やしてやろうと目論んでいるので、今すぐガツシユの元へ乗り込もうとは考えていない様子だが。

ゼオンは俺の説得に納得できるものを感じたらしく。溜飲を下げため息をついた。

「……貴様の言いたいことは分かった。確かにバオウは脅威であり、ガツシユがそれをやたら無闇に振りかざす可能性も考慮せねばならない。これから修行し、力をつけた上で奴を打倒しろというのは別に構わんが、貴様は俺に何をさせたいんだ？」

「そう。——そこでツボ押しだ」

「なんでそんな結論にたどり着くんだ」

あまりにトンチンカンな飛躍にゼオンもついて行けない。眉を歪めて小首を傾げている。

力を込めていた腕からはすでに電撃が消えている。先ほどまでの怒りが少しずつ収まっている、というより、他のことで思考が割かれている証拠。

良い感じだ。

「俺の『答えを出す者』については話したな？」

「ああ」

頷く。『俺』の育ちが一般人のそれとは大いに異なるのは分かっていたはずなので、後々揉めるのも面倒だと思い、特異な力を所持していることを告げた。普通なら異常すぎる「答えを出す者」の力に何らかの感情を抱くのだろうが、ゼオンは特別何の感慨もなく割とあっさり受け入れた。戦いに便利そうだと判断したのか、それとも人間の事情など些末事だと思っているからか。どちらかというと後者だろうな。

「この力で、お前にある特殊なツボを突く。そうすることによって感受性が豊かになり、発想の転換も容易になる。お前の中で様々なイメージも浮かぶようになるだろう。そうすれば、お前の考え方も大分変わる」

「ふむ」



「恐らくこの魔本には、人間との関係やお前の成長も何らかの形で関わってくるはずだ。でなければ人間をパートナーにする必要もないし、期間を限定しない理由もない。長い戦いの中で魔界の王になるにあたって必要な何かを、足りないモノを探すのも目的の一つなのではないかと俺は踏んでいる」

「……成程。人間との出会いが魔物の成長を促進させるのか。確かに一理ある」

腕を組んで一息つく。

ゼオンは本来頭が良い魔物だ。こうして思考する猶予を与えれば素早く答えを導き出せる。英才教育を施され、拷問のような修行を続けていただけのことはある。知能と身体能力において、同年代の中では比肩する者などいないだろう。

「これから押すツボは、言ってしまうえばお前の中にある潜在能力を引き出すためのものだ。人は考え方一つで印象も大分変わるし、力も多少なりとも変化が生じる。それは魔物も同じだろう。」

一度で引き出す力には限度があるため、何度か繰り返しねばならない。だが比較的簡単に強くなれるのは間違いない。それが実力とってお前に役立つかどうかは、これからのお前の成長にかかっている。

どうする、ゼオン？ お前は王になる道を自ら閉ざすか？ それとも俺と共に、王になる道を歩むか？」

挑発ともとれる問い。王になるという覚悟を持つゼオンにとっては愚問でしかない。

しかしこれは重要なものだ。『俺』はゼオンのことを何も知らない。どんな思いを抱えて人間界へ赴き、戦いに身を投じるのかを。

だからこそ、問う。

——王になりたいというなら、それだけの意志を見せてみる、と。

言外に込めた意図を察したのか、ゼオンは口の端をにい、と大きく釣り上げ、三日月のような笑みを浮かべた。

「フン、俺が魔界の王になるのは当然のことだ。今更考えるまでもない」

「なら——」

「だが、その問いに答える前に一つ聞かせろ。貴様は戦う気はあるのか？ 貴様にとって何の利益もないというのに、自分の身を危険な場に投げ出す覚悟はあるのか？」

「……」

ゼオンは。

虚偽を許さぬ鋭い眼光を放ち、俺の目を捉えている。

これは俺の身を慮つての発言じゃない。強い力を持つゼオンにとっての懸念事項、弱い人間であるパートナーが戦いを忌避しては、勝負にならない。

だからこそ、彼も問うている。

それはつまり、戦いから逃げ出す腰抜けはいらないし、足を引っ張る邪魔者ならばそれ相応の対処をとる、ということ。

そこに俺の自由意思が介入する余地は、おそらくない。是と答えようが非と述べようが、ゼオンにとって手間がかかるか省けるかの差でしかない。

ゼオンには記憶を操作する能力がある。最悪の場合、俺の記憶を奪い、それを代価に戦いを強要するなり、戦いを望む無情な人形に仕立て上げるなりするだろう。それだけゼオンの王に対する願望は強く、そのためならば決して手段を問わない非情さを持っている。

だから、

いや、

そもそも。

俺が拒否することはないんだけどな。

「構わない。今まで見れなかつたモノが見えてくるなら、オレはそれで良い」

輝く眼光から目を背けず、視線を交わす。

俺が嘘を言っているかどうか、探る目線。凡俗ならば恐怖に怯え、あまりの威圧に目を逸らしていただろう。特別な力を持っていると

はいえ、俺は元は凡人。他人にこれだけ強い目を向けられることは初めてだった。

それでも、俺は目を逸らさなかったし、差ほど焦りも不安も恐怖も感じず、向き合うことができた。

なんとも不思議な話である。会ったばかりでほぼ他人、血の繋がりも面識もなく、あるのは魔物とパートナーという堅苦しい肩書き。片や相手をまるで信用せず、片や全てを知りながら何も知らない。ダメな要素ばかりで、これで大丈夫なのかと言われれば心配だらけの状況。

でも、

きつとなんとかなる。どうにかなるさ。

そんないい加減な「答え」が、俺のなかにはあった。

「……フン。いいだろう、貴様のことをパートナーとして少しは認めてやる。だが足を引っ張るような愚図はいらん。王に至るまでの道を妨げない凡夫なら構わんが。転がる石ころなど容赦なく蹴り捨てるぞ」

んなこといちいち言わんでも分かつとるつつーの。

無言で首肯。ゼオンはひとまず俺がパートナーであることを認めてはくれた。やれやれ、先が思いやられるなあ……。

「じゃあ行くぞ?」

「ああ、さっさとやってくれ」

ドンと来いみたいなの顔。なんでそんな無駄に自信満々なのかよく分からんけど、既に覚悟は決まっているらしい。ツボを突くって言ったから覚悟する必要なんで無いんだろうけど。

ま、やれって言うなら遠慮なく……。



## 第二話 実験

——ドイツ、テーゲル空港

この日、一週間ぶりの雨が降つたらしく、滑走路はしとどに濡れそぼり、乾燥しがちなベルリンの空気は若干しっとりとしている。冬の低気温のせいで吐き出す息は白く、飛行機から降り立った人々は予想以上の寒さに身を震わせながら、空港の中へと吸い込まれていく。

そんな場所に、今、二人の人物が降り立った。

妙な二人組であった。片方は背の高い中年の男性であり、その手には仕事用と思しき革の鞆が一つ。長年愛用しているのか、ところどころ擦り切れた形跡が見られるが、中に詰め込んでいるらしく、少しばかり口が開いていた。

もう片方はすれ違う人々が凝視するくらい、奇妙な出で立ちだった。成人男性の半分程度の背丈であり、頭に角のような物体が付随している。手足の形も常人のそれと大いに異なり、それがまた、その人物の異様な雰囲気を実際立たせる要因となっていた。

魔物、と。

知る人がいれば、そう呟いていたことだろう。

タラップから身を出した人間は、外気の冷たさに眉を潜めながらも、先を行く者たちが続く。魔物は既に歩き出しており、初めて見る光景に目を奪われていた。

その最中、魔物の方が口を開いた。

「人間とは不思議だな。自力で空を飛べずとも空を行けるのだから」  
若干尊大な口調。感心したような呟きに、隣の人間は目を向けずに応える。

「あまり人間がどうのとか言うな。素性を怪しまれたら終わりだぞ」  
フン、と鼻を鳴らした魔物は、懐へと手を伸ばす。が、ここがどれ

だけ嚴重な場所か幾度も聞かされた魔物は、舌打ちしつつ息をつく。寒い、と人間は言っていた。確かに肌寒い季節らしく、間もなく雪でも降りだしそうな曇天模様である。雲の隙間から陽の輝きは窺えず、人工の明かりの少ないベルリンの空はいささか暗かった。

空港の中へ入ると、さきほどとは打って変わって、肌に心地よい暖気が身を包んだ。外は相変わらずの天気だというのに、窓一枚を隔てた先では別世界のような室温。エアコンという文明の利器によるものとかで、それがこの半世紀ほどで登場したものだと言われたときは驚いたものだ。

今の季節柄、長期休暇に突入した者が多いらしく、旅行者が多く見られ、家族連れの見光客もちらほらと。ロビーは人間たちの話し声が木霊しており、頭上からは音声案内が響き渡る。

人間の文化とはなかなか侮れないものだ。

荷物を回収した人間は、ロビーを出るとタクシー乗り場へと向かう。既に予約してあるホテルへ直行すべく呼び止めた方がいいが、隣を歩いていた魔物の姿がない。

辺りを見渡せば、魔物の方はタクシーのとなりを通り過ぎ、市街地の方へと歩き出しているではないか。

ホテルまで10キロは離れている。徒歩で行けばどれだけ時間がかかることや。人間は声を張り上げるが、魔物はやれやれとでも言いたげな態度で答えた。

「観光だ。せつかく海外まで足を運んだのだ、見慣れん町の風景を見て楽しんでバチはあたるまい？」

「勝手な行動は慎め。いつ何時、誰に襲われるのか分からんぞ」

「何を言っている。貴様の映画とやらが完成するまでしっかり待ってやったのだぞ。いい加減運動不足でストレスがたまっているんだ、少しぐらい多めに見ろ」

人間は言葉に詰まる。事実を指摘され、気まずそうにしつつ、目線を手にもつカバンの中へ移した。

仕事用の道具に隠されて、分厚い本が一冊、入っている。未だほと

んど手にした機会に恵まれない、不思議な力を秘めた魔本である。

これがある限り、魔物は消えることはない。

しかし、無防備になることは確約される。いくらなんでも無用心だという人間の忠告も無視し、魔物はスタスタと歩き出す。

人間は本から視線を戻すと、背中を向けている魔物に言った。

「いいだろう。しかしあまり遠くに出るなよ、私はお前たちのように魔力を感知する力はないんだ」

「心配するな。俺様を誰だと思ってやがる？」

不敵に笑う魔物を見、人間は小さく嘆息した。



実k……ツボ押しは大成功だった。と思う。

いくら「答えを出す者」がスゴいって言ったって、実践する機会があまりなかったんだよ。いやデータ取りとか機械入力とかじゃなくて、人間に試すつてことがなかったのよ。うん。

訓練を経て、この力は既に完成されている。

けどそんな実感ちつとも湧かない不思議。なんでだろ？ 本人じゃないからかな？ おかしいねえー。

さ、そんな考察は後々。

「おいゼオン、大丈夫か？」

頭から煙を吐き出して倒れ伏しているゼオン。さつきからピクリとも動かない。刺激が強かったのか。

実践してみるのは初めてだったので、加減が分からず強めにプッシュしたんだが、逆効果だったのかな？

なんて色々考えていると、ゼオンはゆらりと立ち上がり、目をこちらに向けた……って怖っ！ 目の焦点合ってねえし！ 光つてて格好いい目が腐ったドブ川みたいになってるぞ！ どうなってんの！

頭が前後左右に揺れている。でもって何も答えない。

さすがに心配になってきたな……と思いきや、ゼオンの目がぐりっ

とこちらを捉えた。怖い。マジで怖い。貞子と目があつた気分だよ。

「一体なんだと無言で見返していると、大きな口がカパツと開き、開口一番、

「ウヌー！」

ウヌー！　じゃねえよ。

「どうしたのだデユフォー、顔色が悪いのだ！」

「お前こそどうしたんだ。脳の病気か」

「私は元気だぞ！」

「頭おかしいっつーか一人称変わってるじゃねえか」

「私は優しい王様になるのだ」

「これはあかん」

「おかしいな。「答えを出す者」の力で、強くなるために必要なツボは「全部」突いた。ゼオンも少なからず実感しているはずだ、自分の中で今まで見えていなかったイメージが脳裏に浮かぶのを。」

ひよつとしてミスったか？　ミステイクデユフォーさんなのか？

嫌だな、「答えを出す者」は完璧なんだぜえー、とか言っちゃった先週の俺超嘘つきやん。不良品掴まされたと思われたら嫌だな。

てなわけで、もう一回ツボ押ししてやろうと手を構えると、ゼオンは冷蔵庫の中へと飛び込んだ。そんなに嫌か。

別にわざわざ押ししてやったことを感謝しろとは言わないが、こんなに露骨にビビられるとちよつとショックだ。



「おーいゼオン、飯が冷めるぞ。早く出てこいよ」

聞こえてるかどうか怪しかったが、冷蔵庫の扉がギィーと開いていくと、鯉節をくわえて睨みつけているゼオンの姿が。なんちゅー姿勢しとんじやい。

ひどく恨めしげな顔つきだったが、俺がテーブルにつくと、瞬間移動でも使ったんじゃないかってくらいスピードで反対側の椅子に座った。そーゆーところに無駄に力を割くなよ。まあいいけど。

しかし、これで術が新しく出た。隣の椅子の上に置いてある本は、力の発現によって強い光を放っている。まだ第一の術すら使っていない現状であるが、使える術のレパートリーを増やしておくのは悪くはない。

術は使いこなして初めて真価を発揮する。いくらゼオンが強くても、俺が要所要所での確に撃てねば意味がないのだ。

土壇場で発現して形勢逆転……っていうのも憧れはするんだが、身体張ってまですることじゃない。

戦いは行き当たりばったりでは到底勝利することはできない。初心者の俺でも分かることだ。時間があるうちに使いこなしておく必要がある。どんな術か知っているとはいえ。

「午後は術の練習をしよう」

「う、うむ。やはり練習は欠かせないからな、良い心がけだ」

「ついでにツボ押ししの練習もしよう」

「それは止めてくれいや本当に」

低姿勢のゼオンってなんか嫌だな。

午後二時。

ベルリンから少し離れた場所。フランデンブルク門から記念碑まで、数キロほどの直線道路がある。その付近に展開している広い公園には、人影がまばらに見られるものの、人気は少ない。

人に見られれば騒ぎになる。そのため派手に術は行使できないが、付近で術を使える場所はほとんどない。なんとか人目を盗んでこっそりやるしかなかった。

昨日雨が降ったせいか、地面が少々ぬかるんでおり、その影響もあつて公園内には普段より人が少ない。術の練習をするにはうつつけの場所だ。

ただ、目撃されると悲鳴を上げられたり警察を呼ばれたりして面倒極まりない。さつさと終わらせて家に帰った方がいいだろう。

思えばこの本を手にするのは初めてだし、呪文を唱えるのも初めてだな。いやーやっぱいいなこういうのって、ひどく厨二心をくすぐられる。本を構えて呪文唱えると魔法が使える、みたいな？ しかも「答えを出す者」という最高の特典付き。ひよつとして俺かなり優遇されてね？　なんて、考え過ぎか。自重自重。

さーて、まずはつと。

「第一の術、ザケル」

あ、やべ。唱えちやつた。

直後、背後で凄まじい電撃の音が轟いた。

「……………うわぁ」

嫌な予感がしつつも振り向けば、そこには焼け野原が広がっていた。生い茂っていた草は燃え上がり、木々は全身火だるまになり、悲鳴を上げて倒れた。

改めて見ると、魔物の術ってかなり恐ろしいなあ……。人間にぶつければ間違はなく死ぬぞこれ。原作で誰も死ななかつたのが奇跡としか言い様がない。テイオのサイズでさえ当たり前所が悪ければ死ぬわ。

ゼオンはようやく己の本来の力が使えて満足なのか、どうだと言わんばかりの顔でこつちを見ている。なんでそんな誇らしげやねん。

これが魔物の、魔本の力か。

パートナーになった人間が居丈高になるのも、分からなくもない。突然こんな強大な力を与えられ、それを自由に使えると知って、一度も振るわずにはいられないだろう。過剰な力は持て余す。努力して手に入れたならいざ知らず、簡単に手に入ったとなれば、なおさらだ。これは危険だ。

パートナーの人格次第では、兵器となんら変わらない。

魔物の力を核兵器にたとえた、クリアの発言。今なら分かる、改めて直面してみた、今の俺なら。

「まーそれはそれとして。よーしゼオン、どんどん新しい術使ってみるぞー」

「何、それほど新たな呪文が出ているのか!？」

早くない？ みたいな顔をしているが、何を驚いているんだお前。あんだだけ肉体的精神的苦痛与えられてなんもありませんでしたーなんて言ったら、お前にどんな目に遭わせられることやら。

ページをめくる。当然だが、一部の文字が光り輝いていた。新呪文が出た証だ。

しかし、光っている部分が少ないな。全文が光ると読めるようになり、呪文の力が最大限発揮されるんだけどな。今だと上の三行くらいしか読めないや。

まあ、それもおいおいどうにかしていこう。

まずは第二の術だ。

「第二の術、ラシルド」

お、これはガツシユと同じか。

突き出した手のすぐ前、地面からせり上がった大きな物体。稲妻の紋章が描かれた電撃の障壁だ。

この盾の術は汎用性が高い。防御と反撃、視界遮断、強化を施し反射と、使いどころによっては逆転の一手となりうる。それが大した術も使えない序盤ならなおさらだ。

呪文の力はいまだ解明できていない点が多い。判明している点の一つとして、術は「心の力を込めた結果に過ぎない」ということ。簡単な話、どれだけ強力な術を使おうと、それを動かす心の力が薄っぺらだったらハリボテの城である。心の力の込めようによっては中級呪文を下級呪文で相殺することだってできる。ブラゴのギガノ・レイスをザケル一発で打ち消したように。

強い覚悟……いや、魔物と人間の成長か。心境の変化に伴い術も増え、また変わる。思いを込めれば、それに本は応えてくれる。

不思議なものだ。

「さて次は……ん？」

ページをめくったところで、違和感に気づいた。

本は未だに強い輝きを放っている。とりわけ、新たな呪文が浮かんだページは、文字の部分が強く発光していて、眩い光を周囲に放っている。

それは良い。

問題は、

——なんでしばらく先のページまで光ってんですかね。

紙と紙の隙間から漏れる、紫色の光。新呪文が出た証拠である。

……おい、ちよつと待ってくれ。落ち着かせてくれ。

確かに、「答えを出す者」の力でゼオンの脳に刺激を与えたことで、新たな呪文が浮かぶのではという推測は正しかった。ガツシユやテイオがどうだったかは知らないが、ツボ押しをしたお陰で、キャンチヨメは魔物の中でも一、二を争う強大な力に目覚め、新呪文が三つ

も出た。

ある程度成長したところで突いたからこそ、その程度で済んだ。ならば初期段階でツボ押しをすれば、どうなる？

(いや。いやいやいやいや！ なんてこういう時無駄に答え出すの早いんだよ！ いや、誰だって考えれば分かることだけどー！)

無駄に聴くなつてしまうデフオーの能力を疎ましく思いつつ、更にページをめくっていく。どうしたと言わんばかりにゼオンが無言で振り返っているが、それどころではない。

まさかと思いつながらも、ページをめくる手は止めない。

嫌な予感も、止まらない。

五分後。

「……………」

「どうした、今にも死にそうな顔をして」

ゼオンが怪訝な顔をしている。そんなのが眼中にないくらい、衝撃的な事実が発覚した。

項垂れている俺の手の中で、風に吹かれた魔本のページがペラペラと音を立てている。なおも強い輝きを放つそれは、前半の大部分のページが紫色の光を放っている。

やはり、予感は正しかった。

嫌な予感は、当たるものだ。

ザケル  
ラシルド  
ザケルガ  
ラージア・ザケル  
ラウザルク  
バルギルド・ザケルガ  
ザグルゼム  
ガンレイズ・ザケル  
ジャウロ・ザケルガ  
テオザケル  
ソルド・ザケルガ  
レード・デイラス・ザケルガ  
ジガデイラス・ウル・ザケルガ

うん。

全部出ちやつてたね。

……おいおいおいおいおいおい！ やべえよこれマジでやべえよ！ ヤバすぎるだろ！ どれくらいヤバいかつていうとマジヤバイ。

なんだって術が全部出てるのよ!? おかしいだろ！ 潜在能力云々関係ねえよ！ しかも必死に修行して出たとかいうジガデイラスが出てるってどういうことだ！ ツボ押し効果パネエな！

(ゼオンのツボをいっぺんに押したせいかな。あれ？ でも術って確か魔物の心境に変化が訪れるとかして精神的に成長しないと出ないんじゃないかって？ そういう設定だったような……)

既にその世界にいる以上設定もクソもないんだが。

と、そこでようやく思い至る。

全てを知っている気になって根本的なことを忘れていた。

(……魔本には元々、呪文は書かれていない。本に呪文が浮かぶのは、その魔物が本来持つ力が解放された時。心境の変化、精神の成長、肉体の強化。きっかけはなんでもいいから、魔物が成長して力をつけた時に、隠されていた潜在能力が目覚めて、魔本に呪文が書かれる)

だから戦いの中で新呪文が出るし、それとは関係ないところで呪文が出たりする。

だから、潜在能力を引き出すツボを一気に押ししたりしたら……

「あかん、やってもうた」

いやあーやっちゃったなー、やっちゃたなあオイ。これマジやっちゃったよーもうやんなっちゃうよ。でもやっちゃったもんは仕方ないよねー、やっちゃったんだもんなあー。

でももう諦めるしかないよね。いつそ開き直るしかないよ、だってもうでちゃったんだもん。

「おい、どうしたデユフォー」

そろそろ黙ったままの俺に苛立ち始めたのか、ゼオンが目を鋭くしている。この子って普段からこんなイライラしてて頭の血管大丈夫なのかね。カルシウム足りてないんじゃない？ 乳酸菌とってるう？ (ウザ顔)

「ああ、こりや大変だ……すごく、ヤバい。危険すぎて吐き気がしそう」

「ど、どういうことだ!？」

狼狽えだすゼオン。いや、大したことじゃないし、お前にとっては良いことなんだろうけど。

参ったな。修行して手順を踏んで強くなっていく、というお約束じみた展開を全部すつ飛ばしてしまった。そりゃ、素で強いゼオンに今更特訓なんて釈迦に説法って感じだけど、序盤から滅法強いと、どこの慢心王みたいにかかってくるが良いちゅどーんうわあーみたいになりそうだ。そんなシーンはないけどな。

手を抜く、とは思えない。が、ゼオンはどうも気分が良いと遊ぶき

らいがある。強い魔物ならともかく、弱い相手だと特に。序盤で格下ばかりと戦ってたなこの様子だと。

そもこの魔界の王を決める戦い、実力差がひどくないか？ レインとか特におかしいだろうってくらい強かったし。肉体性能も術もトツブクラスってテコ入れ入りすぎだろう。

一体どんな基準で魔物の子を選定したのか聞いてみたいものだ。

本を閉じる。唱えた呪文はザケル、ラシルド、ザケルガ、ラウザルク、ザグルゼムの五つ。出現した呪文の中から、当たり障りのないものを選んで使った。ゼオンは初っ端から5個も術を使えることに満足気だったので、とりあえずは誤魔化せただろうか。

今はすべての術を使えることは黙っておこう。ゼオンを信用しているとかしていないとか、そういう問題ではなくて、俺自身が扱えるかどうかも怪しい。「答えを出す者」で最善の答えを出せても、俺が『実行』できなければ意味がない。結局、戦いを左右するのは、個人の實力とそれを引き出す心なんだから。

今は少しずつ、前に進んでいこう。

それが今の俺にとっての、最善の答えだ。

まー色々言っただけど、要はやっちゃったものは仕方ないんでどうでもなあれ的な。

別に悪いことなんてないんだし、こいつあラツキー程度に考えとけばいいさ。うん。

原作の流れ？ 何それ、聞いたことがない。というか俺がいる時点でもうバラバラですよねっていう。

さ、細かいことは忘れよう。

せっかくベルリンまできたんだから、そのへんをブラブラしてから



帰ろうか。

——ベルリンの街は意外と静かで、騒音慣れた耳には静けさばかりが残る。

この季節だと日が昇るのは遅く日が沈むのは早いから、基本的に住民たちは午前中には外出せず、陽が昇りきった正午過ぎくらいから外へ出る。当然遠出をすれば帰宅の最中に日没となり、辺りは夜の闇に包まれる。

ベルリンの街は日本と違い人口の灯りは控えめではあるが、皆無というわけではなく、立ち並ぶ店舗から漏れ出す光や車のライトが空を明るくしている。首都東京と比較すると地味目な印象が漂うベルリンの町並みであるが、まるで映画の中といった雰囲気のある建物や落ち着きのある光景に目を奪われること請け合いです。

(そういえば、海外に来るのも初めてだな。かなり今更だけど)

以前は海外旅行とは縁遠い生活だったから、日本のジメジメした気候とまったく異なる海外の空気に少し違和感を抱く。シヨーウインドウに映る自分の今の顔が西洋人のそれとはいえ、すれ違う人が皆ドイツ人ばかりだと、ちよつと居づらい感じがする。なんというか、猫たちの中に虎が紛れているっていうか、どうよ？

まあそれはそれとして。

ひとまず夕飯の買い物である。ゼオンがどっか行っちゃったから、戻ってくるまで帰れないので、その間に買い出しを済ませよう。

ゼオンはどうも単独行動が好きなので、日中も用事がないとどこかへ繰り出して、夕方まで帰らないことが多い。あの野郎、俺が魔物と遭遇したらどうするつもりだ？俺がボコられた頃になつて戻ってきたらツボ押し地獄の再来待ったなしだぜ。

「あ、いっけね。ゼオンに魔力のサーチ方法教えてねえや」

すっかり失念していた。ゼオンが元々使える能力だとばかり思っていたが、アレはデュフォーが教えたものだ。現にゼオンは瞬間移動能力や魔力探知能力を所持していない。後付け、つまり人間界に来て

から手に入れたのだろう。

既にツボを押ししたため、魔力を探る力くらいなら掴んでいるかもしれないが、瞬間移動は無理だろうなあ……。習得するのに何年もかかるって言うってたし。元々素養があるゼオンだから短期間で習得できたのは想像するに難くない。

マズいな。今襲われると良い獲物だ。どっかの店の中に入っていた方が賢明かもしれない。ていうかこの行き当たりばったり感をどうにかしないと。ゼオンとコミュニケーションもうまくとれてないし。そこは今後の課題にしよう。

「お、ストリートライブか？」

どこの店に入るか検討していると、ギターを抱えた青年が路上で旋律を奏でているのが見える。思わず足を止めて傾聴していると、同じように立ち止まって耳を傾けている人がいる。

国が違えども文化は同じ、音楽に対する情熱は変わらないんだな。曲調は、どこかで耳にしたことがあるような……。ああ、ビートルズか。随分懐かしいのを弾いてるなあ。若者にしては渋いチョイスだ。つーかマジで便利だな「答えを出す者」。こんなところで力を発揮せんでもいいのに。

しかし、懐かしい光景だ。日本でも路上で演奏している人を見た記憶がある。国境を越えても分かり合えるモノがあるってのは良いね。目が覚めたら北極の施設だったからなあ。よく考えてみれば人と会うのも久しぶりだしね。

「ん？ あつちにもいるな」

珍しいことに、もう一人路上に立っていた。こちらは指揮棒らしきモノを掲げ、リズムよく棒を振るっている。まだ歌唱は始めていないのか、身体と棒と鼻歌でリズムをとっている。何をするんだろう、と興味を引かれた通行人が遠巻きに眺めていた。

なんとなく気を引かれ、足の進む先をそちらに向けた。観客の背中で姿が見えないのは奏者が小柄なせいかな。

しかしなんだろう、あの鼻歌。どこかで聞いたことある曲調なんだが、お世辞にも上手くないっつーか、むしろ下手くそすぎて萎え――

「……………うん？」

こんなときに便利な「答えを出す者」。下手くそでも既存の曲であれば、断片的な情報から答えを導き出せる。

それで出てきた答えが……ベートーヴェンの曲、らしい。

いや、こんな騒音公害みたいな曲じゃねえよ、ベートーヴェン。こんな曲発表したらあと100年経っても評価されんかったわ。

そしてそいつは歌いだした。途端、取り巻いていた者たちが一斉に口を引きつらせた。

少し離れたところに立っている俺の耳にも届く、不協和音じみた音声。まるで叫び声みたいな感じで歌っているから聞いてて良い気分じゃない。ほかの通行人も顔をしかめている。

「……………ま、まさか」

猛烈な勢いで嫌な予感が押し寄せてきた。背中を這い上がってくる不安。いやいやまさか冗談だろうと思いつながら、よく見える位置へと移動しようと動くのとと、ちょうど曲はクライマックスに差し掛かるのは同時だった。

すると、

「——フォーティンヴォーデン、ウイーベロオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ！♪！♪！♪！♪！」

頭からスライディングした。

### 第三話 キース①

「ウエーンフエン、ヒョーンフエン、ヒョンロンペンチョン、フエン  
チョンペンチャン！」

「……………」

「ピョ~~~~ロフツ！ ウエ———ディンロンフオン、パンチョンペ  
ンチャンポイノイロンロンピーペプ！」

「……………」

「ビーデイルボーデイルヘエンディンフオンデン、フォーデルマイデ  
ンロンベルデン！ ハーマイロンガンビヤービュローローホー！」  
「……………」

「マーデルフオンデン、ウイーベロオオオオオツ！♪！♪！」

そして誰もいなくなった。

### 第三話 キース①

キース。

光線系の術を使う魔物。魔界でも有数の暴れん坊だったバリーの  
ライバル的存在（キース談）。

常に葉巻をくわえていて、片手に持つステッキがトレードマーク。  
術の力無しでも左右の腕をバネのように伸ばすことができる能力が

あり、汎用性は意外と高い。若干顔がビクトリウムに似ているが親戚か何かだろうか。

態度は若干尊大で、一見かなりのの、いや、どうしようもない馬鹿なのだが、頭の悪い言動とは裏腹に、その実力は確かなもの。魔界でバリーにボコられファワード編でもバリーにボコられキャンチョメにもボコられていたが、千年前の魔物たちとの戦いで力をつけたガツシユを、本気を出さずに圧倒した。

ブザライという魔物とのコンビだったからこそ、という説もあるが、物事を冷静に見抜く眼力もあり、敵の術の正体をすぐに見抜く観察眼は本物だ。ファワード編まで生き残っていたのだから、当然実力もあるわけだ。

……まあ『デイカポルク』に騙されてたけど。迷うことなくゼオンの配下に加わってたけど。どうしようもない馬鹿なんですけど。

そんなキースが、目の前に立っている。踊っている。歌っている。泣いている。

「ふう……。今日はこんなところか」

一通り歌い終わると、かなりスッキリしたらしく爽やかな顔をして葉巻を吸い始めた。観客が一人たりとも、いや、俺が残っているんだが、それ以外誰もいなくなるどころか遠ざかっていった。危うきに近寄らず。

別に聞いてもらいたかったわけじゃないらしく、人がいなくなっても気に留めていない様子。すぐ近くでじーつと見ている俺にも気づいていない模様。余程ベーターベンが好きなんだろうな……。

さておき。

(どうしよう……)

どうする、というのは、まあ決まっている。

倒すかどうか、という話だ。

ぶっちゃけ、倒すのは容易だろう。周囲にキースのパートナー・ベルンの姿はない。パートナーがいらない魔物なんてただの的だし、序盤

からデイオガ級に匹敵するジガデイルスを持つゼオンがいる以上、負ける要素は一つもない。これが竜形態アシクロンとか最終形態クリアだったら分からなかっただろうけど、腕飛ばすくらいしかできないキースじゃあお話にならない。慢心していたら負けるかも……、なんて後ろ向きな発想が吹き飛ぶほどの力量差。

もつとも、俺もゼオンがいらない以上、勝てるわけがないんだが。

敵側とはいえ原作キャラ、後半でそれなりに存在感ある人物を倒すことに抵抗はないのかと言われれば、まあそれは……

「ん？ どうした人間？ 私の美声に酔いしれて声も出ないのか」

「……………」

終始こんな感じなので、倒すことに抵抗なんてちーつともわからなかった。

なんだろう、この腹立つ感じ。実際に対面して見ると分かるこのふてぶてしさ。漫画だと非常に個性的で見ていると愉快なお馬鹿キャラで済んだのに、いざ直接相對してみたらご覧の有様。実はこやつ、馬鹿なだけでいいやつなんじゃないの？ って思っていた昨日までの俺にサヨウナラ。

いやアンタさつき会ったばつかやん、と思ったそこの貴方。甘い、甘すぎる。第一印象がその人物の評価に直結するのだよ。さつきのサウンドノイズとウザい言動が妙なハーモニーをなして俺の期待値を低空飛行どころか地面にめり込ませた。これはアレだ、性質的に俺とこやつはマツチしないだろうな。

……いいよね？ もうやっちゃってもいいよね？ ゴールしてもいいよね？ 別に倒してしまっても構わんのだろう？ ぶっ殺す、と思つた時にはもうすでに行動は完了していないといけないって兄貴も言つてたしね。

ようし、パパ今日も元気に倒しちゃうぞー。

——ゼオンが帰って来たらな。

さ。今のうちにどっかに身を隠さないと。俺が魔物のパートナーだとバレたら面倒だ。ベルンもないし、今なら襲われる心配もないだろう。しかしゼオンにどうやって連絡をとればいいんだろうな？ 携帯電話なんて持ってないし。いつか買いたいところだけれど、そもそも俺に戸籍が残ってるとは言いが切れない。既に死んだことにされてそうだし。その辺りちよつとどうにかしないと。

と。

キースは短くなった葉巻を地面に落とし、息をつく、俺の背中をギロリと睨んだ。

「その人間、どこへ行く？ 魔物のパートナーなのだろうか？ 戦わんのか？」

……………うつそおん。

ギギギ、と機械仕掛けな動きで振り向く。キースはポンポンと杖を手の中で弄んでいる。

俺の方を見ながら。

一応、念のため。体が向いている方に目線を送る。誰もいない。キースの華麗なる歌声によって人払いは完遂されていた。なんちゆう気遣いや。

言い逃れは、無理っぽい。もう一度、今度は身体ごと振り向く。律儀にもキースは棒立ち状態で待っていてくれた。意外と真面目なヤツだな。

「……何故俺が魔物のパートナーだと分かった？」

俺の傍らにゼオンはいない。人間に魔力はないから、感知されることはまずないはず。術を使ったわけでもないのに、どうして気がついたんだろう？

「とぼけているつもりか。フン、魔本を堂々持ち歩いて『パートナーじゃありません』だと？ どこの世界にそんな馬鹿がいるんだ、この



馬鹿が！」

「……………あ」

ソウイエバソウデスネ。

公園で練習してからずっと持ちっぱなしだったね。せめてリュックに入れておけば良かったかしら。考えてみれば当たり前のことでしたね。

あちやー、またやつちやったなあ。やつちやったよオイ。これマジでヤバいんじゃないか？ どれくらいヤバいかつーと初期キャンチヨメだけでゴーム倒そうぜレベルなくらいマジヤバい。後でゼオンに怒られちゃうかもしれないね。言い訳考えておかないと。「答えを出す者」よ、上手い言い訳を考えておくれ。

『空飛ぶブリを追いかけていたら魔物の罠だったんだぜ！ 俺は悪くねえ！』

ねえわ。

鯉節だったらワンチャンあるかもな。

「フハハ、こいつは傑作だ！ こんなマヌケなパートナーが存在するとはな！ しかも都合なことに、魔物を連れておらずとも本は持っているとききた！」

む、悠長に構えてる場合じゃなかった。

マズいな。俺がパートナーであることはバレているだけでなく、魔物を連れていないことも知られてしまった。一蓮托生となる相方を欠いた状態では、敵の攻撃を防ぐことも応戦することもできやしない。

……………ん？ て、ちよつと待て。

「早々に脱落させてくれるわ！ くらえ、『ガンズ・ギニス』！」

両手を前に突き出し、技名を大きく叫んだ。

……………。

当たり前のように何も起きなかった。

「しまった。ベルンは映画の打ち合わせで夕方までいないんだった……」

気づくの遅っ！ いや、俺も忘れてたけどー！

あ、危なかった。ちよっと焦ったぞ。『おいやめろ馬鹿早くも俺の第二の人生は終了ですね』とか思っちゃったじゃねーか。驚かしやがって！ 最初から能力使えば良かったねという話ですよ。

やーいバーカ馬鹿、単なるバーカ。そんなんだからボコられポジから逃れられないんだよ。ついでにお前の最後の資格好悪いんだよ。でもバーガス・ギニスガンはカッコ良かった。語感がいいよね。

「チキショー！ せめて火があれば、このクソつたれの本を今すぐ燃やせ、る……？」

プンスカ怒っていたキースは葉巻を噛み千切らんばかりに歯を剥いていたが、ふと、視界に映る煙に意識が向いた。

俺の視線も同じ方向へ。

ちりちりと赤く燃えながら、煙を立たせる葉巻。

燃えている葉巻。

なあ母さんや、これってどうやってつけたんだい？

いやーねアンタったら。そんなのライターに決まってるじゃないの。うふふ。

「……………」

「……………」

「……………火、あつたね」

「……………ああ、そうだな」

ビュオオ、と吹きつける風。冬の寒さが染み入るベルリンの街中で、男一人と魔物一匹は半ば呆然と佇んでいた。

うーん、シニールだ。

まあ、それはさておき。

「さ。今日はこの辺で失礼するよ。良い歌をありがとう」

「待たんかアアアアアアアアアアアアアアアアアツ！」

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!」

強烈なキックを喰らった。きりもみ回転をしながら吹き飛ぶ俺。地面にバウンドし、木にぶつかって止まった。

野郎……突っ込みに蹴りを使うなんてとんでもねえ奴だな。もつと人間に気を使つて下さい。人間は貴方よりもデリケートなんです。

ブルブル震える手で、キースを制する。

「ま、待て……待ってくれ！」

「ハツ、命乞いが通じると思っているのか!？」

「違う、そうじゃない。聞いてくれ……」

「なんだ、言ってみろ」

「俺は確かに魔物のパートナーかもしれない。けれど、俺だって一生懸命生きているんだ。今まで辛いことだってあったし、悲しいことだってあったさ。時には亡き母のことを思い出しながら涙することだってあった。理不尽ばかりなこの世を恨むことだってしよちゆうだった。けれど立ち止まってばかりじゃダメなんだって、俺は気づいたのさ。病気の父と母と妹と弟と祖父と嫁のためにも、俺はこんなところで死ぬわけにはいかな——」

「ブラボオオオオオオオオオオオオツ！」

「ぶるあアアアアアアアアアアツー！」

思いつきりブン殴られた。

「な、何をするんだ！ 人が感涙モノの話をしているというのに！」

「馬鹿め！ そんな嘘くさい話に感動する馬鹿がどこにいるんだ馬鹿が！」

ですよー。

「ついでに言うと、それがマジだったら貴様の家系病弱すぎるだろうが！」

あ、そこ突っ込むんだ。ホント律儀だな。実は真面目なのか？

……なんてふざけてる場合じゃない。

蹴られたせいで距離をとれた。すぐに立って逃げないと。

かつてないほどの全速力で脱兎の如く駆け出す。こんなこともあろうかと研究所時代に身体を鍛えておいて良かったよ！ いつか魔物と戦う日に備えておこうと真面目に研鑽を積んでたあの日の俺ナイス！ お陰でスリムなデユフォーから筋肉質デユフォーになっちゃったけど、それくらいいいよね。

しかし計算外だったのは、キースの想定外のパワーだ。

魔物の腕力を舐めすぎていた。ボクサーに殴られたんじやないかってくらい強烈な一発をモロに喰らった。足が生まれたての子ヤギのようだ。ツツコミはダメージ換算ナシじやないんだね、現実って厳しいや。クソが。

逃げなければ。どこに、と思うも、行くあてなんて無い。ゼオンがどこにいるのか分からない以上、遭遇するまで走り回るしかない。それも、キースのパートナーが駆けつけるよりも早く。

震える足に鞭打ち、一目散に走る。とにかく誰も巻き込まないよう、人の少ない場所を選び……たいところだが、甘い考えはすぐに却下した。

人気の少ないところならキースも人目を憚らず、今まで使っていない腕を伸ばした攻撃を行うだろう。今は本通りから外れた人気の少なめな道とは言え、少なからず通行人の姿が遠くに見える。少しは自分が魔物という自覚があるらしい。

巻き添えを恐れて人目につきにくい細い路地なんかへ飛び込んでみる、もう一発強めのお見舞いされてお陀仏だ。

やむを得ない。誰かしら巻き込まれるだろうが、身の危険にはかえられない。我ながら外道じみた考えだったが、満身に戦えない俺は我が儘言える立場ではなかった。

それに、人通りの多い場所なら、キースも騒ぎを大きくできま—

「おおブラボー……おおブラボオオオオオーツ！」

そんなこたあなかつたぜ。

雄叫びを上げながら突撃してくる馬鹿。衆人環視など目もくれず、両手をグルングルン回転させながら人を跳ね飛ばし、猛牛のようにドカドカ突っ走る様は、どこからどう見ても馬鹿だった。

しかし一概に馬鹿とは言い切れない。あれは馬鹿は馬鹿でも、純粋な馬鹿力は馬鹿にできない馬鹿だ。馬鹿は計り知れないというがまさにそれである。

「本を寄越せえええええええっ！ 本置いてけええええええええっ！」

「妖怪かよ！ つーか置いてくわけねえだろうが！」

「ならちよつと燃やさせる！ 先つちよだけでも構わんで！」

「全部焼けただれるわ！」

傍から見たらどつちも馬鹿だった。

だが馬鹿を披露しながらでも、キースの足は加速し続けている。魔物の子の身体能力は、人間のそれとは比較にならないほど高い。俺が三步走る距離を、キースは一步で飛び越えてくる。ふざているように見えて、キースの顔はマジだった。

魔物の子にとって、他の魔物はライバル。そこに例外はない。王という座席がひとつしかない以上、椅子取りゲームの勝者はただ一人。だからこそ、ガツシュ達のように手を組んで戦う魔物は稀有な存在な

のだ。

キースは元々ある程度の強さを有している。だから群れる必要なんてないし、魔物を見つければ即攻撃は当たり前だった。

誰も助けてはくれない。味方となるのは、己の魔物ただ一人。

(だったら……！)

ゼオンを見つけるまで時間を稼ぐだけだ。

建物の角を小さく曲がり、すぐさまダッシュをかける。一秒後、すぐ真後ろで何かを着弾する音がした。拳がコンクリートにぶつかったというのに、巨木をへし折るような音がして血の気が引いた。

あんなものをそう何度も喰らってはたまらない。次の曲がり角目指して走りながら後方を確認すると、伸ばした腕を引き戻しながらキースが現れた。

思ったよりも距離がとれていない。適当に挑発しながら鬼ごっこに付き合わせる予定だったが、これだとすぐ追いつかれる。

舌打ちし、すぐに予定変更。曲がり角よりも手前でブレーキをかける。後ろの方で怪訝な声が聞こえた。急な減速に疑問を抱いたのだろう。もう後ろを振り返る余裕はない。

再び発進。扉を肩からタックルするように開き、奥を目指して走り出した。

キースは伸ばした腕を回収すると、青年が曲がった場所辺りにまでやって来た。

「逃げ足だけは早いな」

つまらなそうに呟く。しかし口元は楽しげに歪んでいる。

人間とは脆く弱い存在である。キースが殴れば紙くずのように吹き飛ばし、魔力もないため自分だけの力で戦うことなどほとんどできない。魔物と相対したところで一方的に捌られる。

なんと無力、なんと無様。人間など所詮この程度。

そして同時に、キースは少し思う。

(だが、素早い)

殴られ蹴られ、こちらが強者であることは身体で理解させた。最初は舐めた態度だった青年も充分思い知ったはずだ。魔物の力なしでは決して勝てない相手だと。

しかし振り返った青年の目を思い出す。アレは恐怖に怯え逃げる兎の目ではなかった。危機の中でも一縷の望みを信じて逃亡する獣の目だ。

大した力など無いクセに、あれだけ痛めつけられたクセに。まだあんな目ができるのか。

「人間にしては、なかなか楽しませてくれるじゃないか」

だが、それもここまでだ。建物に逃げ込んだ以上、逃げ道は限られてくる。一階の出入口を抑えてしまえば、青年は上の階へと逃げるしかない。それくらい分かるはずだが、それすらも考える余裕がなかったのだろうか。

いずれにせよ、ここが終点となりそうだ。

拳を鳴らしながらキースが前へ踏み出した瞬間、店の中で激しい警報が鳴り始めた。

突然響き渡った音に、キースが少なからず驚きを得ていると、店の中から人間たちが我さききにと出入り口目掛けて駆け込んできた。かなりの人間が建物内にいたようで、滝のように押し寄せてくる。危うく飲み込まれそうになる直前で、キースは横へと身をどかした。

(奴の仕業か……?)

火災、の線はないと断定。青年が逃げ込み、キースが到着して直後だ。そう都合よく警報など鳴るまい。察するに、青年が店内の人間を巻き込まないよう、警報を鳴らして外へ避難させようとしたのか。

だとしたら、ぬるい。

混雑する出入り口から身を引き、手近なショーウィンドウ目掛けて拳を放つ。ガラスは簡単に割れ、そこから店内へ飛び込むと、店内に人影は見当たらなかった。まだ鳴り響く警報の音を煩わしく思いながら、奥へと足を進める。

店の中にもう人がいない……ということはないだろう。確信を持って足を進めると、奥側にある他の出入り口に人が殺到しているのが窺えた。

(まさか、混乱に乗じて逃げたか?)

だとしたら面倒だな。キースは思い、ひとまずカウンターの上へと移動する。キースの背丈は人間の成人男性よりも低い。店内にいたのは女性客が多いものの、キースの目線では柵や人のせいで奥まで見渡せない。

目を細め、逃げ惑う人ごみの中にあの男がいないものかと探る。

既に逃げてしまったのか、青年の後ろ姿はなかった。

否、とキースは否定。わざわざ退路の少ない建物内部へ逃げ込んだならば、無策というわけでもあるまい。それにキースが到着したのと青年が逃げ込んだ、その時間の差は数秒足らず。警報を鳴らし、反対側の出口から出たならば、後ろ姿が見えないはずがない。

まだ中にいる。それも、割とすぐ近くに。

確信をもつて判断を下すと、キースは目を閉じた。

背後の雑音から意識を逸らし、耳に神経を集中させる。一階に隠れているか、上の階を動いているか。一階には……逃げ惑う人の気配だけ。ならば、そう、上だ。上にいる。

何人か逃げ遅れた人間の中で、走っている音。音にも種類がある。遠ざかる音と、近づく音。近づくのは階段やエスカレーターを使って下りようとする者。あれが最後の人間だろうか。

すれ違いざまに、店員と思しき人間に問う。

「おい。上の階に男がいなかったか? そう、金髪の男で……大きな本を持っていたはずだ」

「え? そ、その人ならさつき二階ですれ違いましたけど……」

やはりか。キースは笑みを深くすると、困惑する店員を置き捨て、カウンターから飛び降りる。

ゴールは近い。天井を見上げ、キースは右腕を掲げた。



店に入って早々に後悔した。

休日ではないのに、店内には人が多い。午後の買い物客が多く見られ、火災報知器の作動で上の階から人が大量に駆け下りてきた。思ったよりも素早いリアクションは幸いだった。

無関係な人間を巻き込んでしまう自己嫌悪。だが、「答えを出す者」がここへの逃走ルートが最善だと示している以上、それに従うしかない。手段を選べるキースと違い、俺には遮二無二逃げる他ないのだから。

幸い、お互いに術を使つてないせい、目に見えた被害は今のところない。

ゼオンもキースも攻撃的な術を連発するので、戦うならば極力障害物がなく広い場所が好ましい。

徹底的な時間稼ぎ。それが「答えを出す者」が提示した答えだ。

入ってきた入口からは見えない位置にある階段を使い、上へと目指す。屋上へ出られれば、ある程度行動の自由がきく。逃げることで完全にできなくなり、ゼオンが見つ付けてくれる可能性は低くなるものの、誰かを巻き込む懸念は消えるし、いざとなれば隣の建物へ飛び移れる。隣接する建物との間隔が狭いからこそできる芸当である。

(上の階まで行けば、少しは時間を稼げる。あとは非常階段辺りを使つて、外へ出れば……)

人間である俺が真正面から来ないことなど、向こうだつて承知の上。俺がどこに隠れているか、キースには見当がつかないはず。術が使えればフロア全体に攻撃することだってできるかもしれないが、いちいち腕を振り回して物陰まで漁らなければならぬとなると、無駄に時間を費やす羽目になる。もつとも、それも稼げて一、二分だ。

早く来てくれ、と切に願う。ゼオンが来さえすれば、いつ襲いかかってくるか分からない相手に怯えながら、息を切らして走り回らずに済むのだから。

しかし、そんな皮算用もすぐに瓦解する羽目となった。

足を前へ出した、その瞬間、  
俺の足元の床が、爆発した。

急に足元の感覚がなくなるのと同時、衝撃が全身を強かに襲う。バラバラに砕けたコンクリートが真上へとぶちまけられ、粉塵のカーテンが生じる。その中で、白く細長い何かは虚空へ突き抜けていくのを見た。

キースの腕だ。

(ゆ、床をぶち抜きやがった?! あいつ馬鹿じゃねえの!?)

一体どんなバ怪力をしてんだあいつ! いや、それより、階段を使えよ! 常識的に考えて!

瓦礫が階下へと落ちていく中、代わりに小さめの影が下から飛び出してきた。下の階から華麗に飛び上がったキースは、衝撃で後退した俺の眼前に降り立つ。

呪文を使わずとも、この程度造作もない——不敵に笑むキースの顔は、上に逃げたのは失策だと物語っていた。

(くそ……こつちが正しい「答え」じゃなかったのかよ!?)

「答えを出す者」は既に使っている。あの場における最善の答え、建物内部に逃れ身を隠し、ゼオンが来るのを待つ——デュフォーナリの解釈を交え、実践してみた結果がこの有様だ。俺があれだけ余裕綽々だったのも、全ては「答えを出す者」があるからこそ、必ず逃げられる方法を教えてくれる力があつたからだというのに。

本当にこれで良かったのか? これが正しかったのか? 信じた結果がこれなのか?

いくら問いかけても、答えは出ず。いくら悩んでも、今更遅い。人が完全にいなくなった現状、キースはあらゆる手段を用いて俺を叩き潰すだろう。ニタニタと笑いながら距離をゆつくり詰めるキースに、

俺は視線を逸らさないまま引き下がるしかない。

もうどこにも逃げ場なんてない。どこに行っても逃げ切れる自信がない。せめて時間を稼ごうと後ずさりしていた背中に、硬い感触。フロアを支える柱を背にし、俺の動きは停止した。

ちくしよう、これで終わりなのかよ……。

こんなところで負けてしまうのか。

まだ何もできてないっていうのに……っ！

「さあ、おとなしく本を渡——」

一步を踏み込んだキースが言い終える直前。

横から何かが飛んできた。

完全に意識が俺へと向いていたキースに避ける手段はなかった。鈍い音が響き渡り、不意打ちを受けたキースは横手へと吹き飛んでいく。カウンターに激突しても勢いは止まず、やかましい音を立てながら柵を突き破り壁に激突した。

呆然とする俺の目の前に、ぶつかった何かが落ちてくる。

ふわり、と。

割れたコンクリートの上に降り立った小柄な影。

「街中で騒いでいるバカがいると思えば——」

おもむろに立ち上がり、ゆらりと柳のように身を揺らせば、いつか見た紫電の眼光が間近にある。

「——随分と楽しんでるじゃないか。なあ？ デュフオー」

ゼオンの方こそ、楽しいな口調でそう言った。

まるで獲物を見つけた猛禽類のように、深く強い笑みを浮かべて。

## 第四話 キース②

ゼオンが現場に到着した時には、デュフォーは追い詰められていたように見えた。

魔物と真正面から戦っても勝ち目はない。非力な人間は無様に逃げ回るしかなく、事実デュフォーは怪我を負いながら建物内部へと逃げ込んでいたところだった。

悪運の強い男だ、とゼオンは思う。敵がパートナーを連れていたら、生き延びることなどできなかつただろうに。

お間抜けにも、相手もパートナーがいらないらしく、素手でデュフォーを攻撃している様子だった。だとすれば相手は余程素の力に自信があるのか、それともパートナーをすぐ呼び出せられるのか……いずれにせよ、ゼオンが来た時点で彼我の優劣が確定している。

尻餅をついていたデュフォーは、幾分驚いた風な顔をしていた。「……よくここが分かったな」

「街中で警察とやらがうろついていたのでな。事情を聞けば怪しい二人組が喧嘩していた、片方が腕を伸ばす怪人だとか。いくらか探す手間が省けたぞ」

それくらい言わずとも分かるだろうに、と目線を投げる。  
と。

「……………」

「どうした？ デュフォー」

見ればデュフォーはうつむき加減になり、額に手を当てている。頭痛でもするのかな、と無言で待っていれば、ようやくこちらに気がついたデュフォーは、僅かに慌てた様子で首を振る。

「いや、なんでもない」

息をつき、なんでもなかったかのよう装う。何かあったと判断したからこそ問うたのだが、それ以上問答しても意味がないだろう。戦うのに支障がなければ問題はないのだから。

「まあいい。それより、せつかく敵と出会ったんだ。少しは楽しませてもらいたいモンだな」

吹き飛んだ魔物の方へ一歩踏み出す。デュフオーも遅れて立ち上がるが、その寸前に、何かを呟いた。

「今、いや、さつきも……」

囁きほどの小さな声は、ゼオンの耳には届かなかった。

#### 第四話 キース②

「成程な。騒ぎを大きくして街中を徘徊していたパートナーを引き寄せたのか。これはしてやられたな」

ゼオンの蹴りを喰らったキースは、頬をさすりながら起き上がる。

不意打ちをくらったにしてはダメージが窺えない。原作でリオウの鎧も一撃で粉碎していた驚異のキックなんだが……やはりコイツ、馬鹿だが強いな。それともゼオンがまだ身体能力がその領域まで達していないだけなのかね。

「阿呆のようできてなかなか頭が回る。どうやら認識を改める必要があるようだな」

「そうなのか、デュフオー？」

「吾輩の計画通りである」

「嘘をつくな貴様。というか、その口調はなんだ」

律儀にもゼオンはボケに突っ込んでくれた。あれ、なんか予想外に優しい。てつきりウザい死ねと内心思いつつ派手に舌打ちかますくらいするんじゃないかと思ってたけど。

「まあいい。パートナーが出てきたということは、貴様も戦う準備は整ったということだ。だが、失念してはいないか？ 貴様が騒ぎを聞きつけやって来るということは、私のパートナーも間もなく来るということだ」

そうして粹がっついていられるのも今のうちだ、と。立場が逆転してい

るといふのに、えらく自身のこもった口調で語るキース。

パートナーさえ来れば、お前たちなど敵ではないとでも言いたげであり、余裕からか葉巻を再び吸い始めた。ゼオンの強さを肌で感じていないわけではなからうに。それほどまでに自分の力に対する自信が大きいのか。

余裕云々はともかく、キースの言い分にも一理ある。確かに、ゼオンが素早く駆けつけてくれたお陰で俺は対抗手段を得られたが、あつちにならなくてパートナーはいる。ゼオン同様、騒ぎを聞いてここにやってくる可能性はゼロじゃない。瞬間移動が使えないゼオンが到着したならキースのパートナーも間もなく登場することだろう。

……もつとも、近場にいたららの話なんだが。

~~~~~ 一方その頃 ~~~~~

「お客さん、申し訳ないんだけど、この先しばらく渋滞してるみたいなんだ。どうする?」

「いふあ、もんふあいないふお。ふおつはらははふひてひふ」

「タクシーン中でイモ天食ってんじやねえツ! (バキツ)」

「あべしっ!」

自信満々な発言から一分が経過すると、キースの額に脂汗が浮かび始め、二分もするとそろそろと挙動不審になり、三分もすると地面に座り込んでしくしく泣き始めた。不憫すぎる。

多分、パートナーのベルンは、まあ大方、来る途中で渋滞に引っかかって動けないか、それとも迷っているかのどっちかだろう。恐らく前者だと思うが、それはこちらの知ったことではない。

「ヤツのパートナーが来ないようだが……怖気づいて逃げ出したか、それともどこぞで彷徨っているのか」

「吾輩の計画通りである」

「貴様それしか言えんのか」

確信はある。「答えを出す者」は自分がまったく知らなくたって答えを出せちやうのである。さっき本領発揮して欲しかったけどな。

ベルンが来るまであとどれくらいかも、おおまかな検討くらいはついている。どこで打ち合わせをしているか知らないが、少なくともあと一、二分は来るまい。

いやー良かった。

俺としては魔物と戦いにならずに済んで良かった良かったくらいの気持ちだった。だって命の危険に晒されるんですよ？ 死にたくないでしょ？ いくらチート能力があるからってわざわざ危ない経験なんてしたくない。人間ですもの。

安全に事を運べるならそれでいい。キースは杖と葉巻以外何も持っていない、ということは、人間の方が魔本を持っているんだろう。

だとすれば、無理してキースと戦う必要はない。魔本を燃やせない以上、戦いから完全な形で退かせるには至らない。勿論殺すだとか致命傷を与えるとか、そういうやりすぎな展開にもつていくなら話は別。そうなつてくるとさすがに俺も待ったをかけざるを得なくなる。

まあ、ゼオンも時間の無駄と判ずるだろうし、そこまで心配はしていないんだけどな。

少なくとも、俺はこの時点ですつとオサラバしたいからとつと帰りたいおうち帰ると思っていた。「一方的に殴られる痛みと怖さを教えてやろうか!？」と仕返しザケル連打なんて考えない。とにかく安全に事を終えられたらナーと平和ボケしたことを終始考えていたのである。

——ところが、それじゃまったく気が済まないというお方がここにひとりおられるということを俺はすっかり忘れていた。

「チツ、とんだ骨折り損だ。わざわざ街中に出向いたつてのに、こんなしけた雑魚しかいないんじや腹の足しにもなりやしねえ」

バチツ、と火花が散る音。音はゼオンの額から迸る、紫電の光。ゼオンの感情が高ぶり始めた証だ。

昨日俺が見たのと同じ、強い感情、特に怒りを抱いた時に発現するもので、術を使わずとも使える、人間程度なら卒倒しかねない電撃。どうやらストレスが蓄積していたらしく、戦って鬱憤を晴らしたいとか考えていたのだろう。

魔物の子たちの戦いが始まってからどれだけ経つのか、俺にも正直分からない。ただゼオンと出会ってから一週間、一度も魔物と遭遇したことはなかった。魔物の子は一部の例外を除き、誰も彼も王を目指している。その想いには是非もない。

ゼオンだってそうだ。目的が違うとは言えども、王を目指して戦うことに異論はない。自分の実力に絶対の自信がある、王になることは絶対だと言った。

だから、

「やるぞ、デュフォー」

ゼオンはまったく躊躇わない。敵が抗う術などなく、まともに太刀打ちする力がない格下だと分かっている。相手が敵であるならば、必ず倒す。情け容赦もなく、確実に。

さすがに可哀想じゃないか。ゼオンに意見しようかと思っただが、振り向いたゼオンの有無を言わさない鋭い眼光に、たじろいだ。

アレはダメだ。

何を言っても受け入れない。

敵に情けをかける必要はない、と目線がそう物語っている。確かにそうだ。原作キャラとはいえ、今の俺たちにとっては倒すべき敵。情けは不要であり、手加減も無用。

単純に、俺の戦う意思が薄いだけ。ただでさえデュフォー乗っ取ったり術全部発現させたりと原作ブレイクしまくってるのに、キースを魔界へ送り返したら、もつと予想外で奇天烈な展開になってしまいうんじやないか、という個人的な理由。端からすれば非常にどうでも良い事情であるが、俺にとっては大問題である。

ゼオンを王にしてやりたい、とは思ったさ。でも極力戦いたくな



い、原作通りの流れで行きたいって思うのは、変なことじゃないだろう？ 原作とズレにズレて、序盤でいきなりファウード出現光子力ビーム日本沈没、なんて展開になったら俺はどうすりゃいいんだ。ゾフィスの手下の魔物が全員『シン』取得したらどう対抗すりゃいいんだ。ジガディラスどころかクリアだってどうにもできねえよ。

ここでキースを失うのは、俺の脳内に残存していた既存のシナリオを大いに逸脱してしまう。だが、まだ出会って間もないゼオンの手綱を、俺は握っていない。

相手の意志を尊重する、なんて高尚なものは俺たちの間に存在しない。あるのは単純な利害関係ただ一つ。実は薄皮一枚で繋がっているような、脆い絆である。

(……仕方がないか)

今の俺に説得する言葉はない。何を言ったところで、ゼオンの機嫌を損ねるだけだと分かってしまった。

本を右手で持ち上げ、ページをめくる。次第に輝きを増していく魔本に、心の力が流れ込んでいく。

「なっ、ちよ、お前ら、待——っ！」

膨れ上がる魔力の波動にキースも血の気が引いたらしい。我に返るや否や慌てて待ったをかけるが、

容赦はしなかった。

『ザケル』！』

直後、ゼオンの手のひらからすさまじい電撃が放たれた。

ツボ押し之恩恵によって引き出されたゼオンの潜在能力、それを最大限に生かした、全開状態のザケルは、現時点で下級呪文でありながらギガノ級程度なら相殺とはいかないまでも、軌道を逸らす程度の威力を孕んでいる。後半の強力な術合戦を知る者からすれば、なんだその程度、という認識だろうが、少ない術で相手を制する必要がある序盤において、強い術を使えることが如何にアドバンテージを生むか、

想像するに難くはない。

強烈な電撃が直撃したとあつては、さしものキースもただでは済まない。直撃した雷の衝撃に吹き飛んでいく。ただ、致命傷には至らない。あくまで衝撃で吹き飛んだだけで、キースは悲鳴一つ上げない。だが、そこで終わらない。

すぐ前にいたゼオンの姿が消えたと思いきや、飛んでいくキースの進路上に銀色の影が窺えた。瞬間移動ではなく、人間には正視できないほどの驚異的な速度で肉薄したに過ぎない。俺の目にはワープしたようにしか見えなかった。それはキースも同じことだろう。

もつとも、そのの上を行くのが「答えを出す者」だ。ゼオンが今どういう風に移動したのか、今何をすべきか。その問に対する的確な答えを、俺が考えるよりも早くたたき出す。そして思考よりも早く、身体が最善を最速で体现する。

『ザケル』！』

『オギヤーツ!!』

無防備な背中に電撃を喰らい、キースはたまらず悲鳴を上げ、全身黒焦げになって倒れ伏す。

うーん、ちよつとやりすぎたかなあ。

あれは、人間には耐えられないだろうな……。下手をすればトラウマものの雷撃である。ロデウウつてよくもまああんなにもザケルやらザケルガやらを何度も喰らってまた立ち上がったもんだ。そこは素直に感心するよ。

いくらキースでも、直撃を二回も喰らったらダメなんじゃないかな  
……?」

と、思いきや。

「ぐ、おお……、これしきのこと……!」

驚くべきことに、キースはまだ動いていた。体中に鈍い痛みがはしっているだろうに、四肢を張って蠢きながらも立ち上がろうとする。既に息も絶え絶えといった様子だが、目から戦意は欠片ほども失われていない。

ゼオンは、ほう、と感嘆の息をついた。

「下級とは言え、俺の電撃を受けてまだ意識があるか。タフさだけならなかなかのものだ」

雑魚にしてはやる。そんな感想が、俺にはなんとなく伝わった。久々の戦いで少し興奮気味らしい、どこかゼオンは楽しげだ。まだまだ暴れ足りない様子で、手のひらで電撃を遊ばせている。身体から湧き出る衝動を抑えきれないといった具合に、バチバチと鳴る電気が大気を焦がす。

……なんか絶好調ですねゼオンさん。ここに来てイケイケじゃないですか。よつぽど退屈だったのね。ひよつとして、俺が何もしなくても良い流れですか？ 俺は呪文を唱えるためのスイツチ兼稼動用バッテリーつてことつすか。デモルトのパートナーinデモルト、みたいなの。

ちよつとだけ期待してただけだな、「答えを出す者」でゼオンをサポートして勝つ、っていう展開。よつぽど相手が強くなり、ゼオンが暴れて俺は術を唱えるだけになるんじゃないかって危惧してたけど、まさにそうなつちやったね。

キースなら或いは、と思っていたけど、やっぱり今じゃ無理か。パートナーいないんじゃないよね。

もう俺が呪文を唱えなくても良いだろ。あとはゼオンが気絶させるなり捕縛するなりして、やって来たキースのパートナーをとっ捕まえればそれでおしまい。やけに呆気ないし味気ない初勝利だった。

ただ、収穫はあった。

(……………やっぱりか)

「答えを出す者」を使えば、キースの倒し方は分かるはず。俺ひとりじゃどうにもならなかったけれども、ゼオンが傍にいる現状、術を使えるならば、余裕をもって戦える。いつそゼオンだけで戦わせてもいいんじゃないか？ とさえ思っていた。

なのに、答えが出ない。

いくら考えても、分からない。

いつもなら瞬時に浮かぶはずの答えが、見つからない。あまりに予

想外な事態に頭の中が混乱しだした。

(どういうことだ？ まさかゼオンがキースに勝てないってことなのか？ ……いや、いくらなんでもそりやないだろう。こんだけ一方的にボコってジガディラスまで使えてしかも俺までついているのに、負けるとか有りないし)

しかし、「答えを出す者」は何も答ええない。一体どうやったら勝てるのか、どうして勝つ方法を出さないのか、それすらも答えず、沈黙したまま。

どうということだ。

今更になって不調かよ。今まで訓練つつか実験に付き合わされてきたつてのに、全部水の泡か。今までののはなかったことにしましようつてか。イツツオールフィクションか。どういうこつちやい。俺の数年間を返せ。

「答えを出す者」が役に立たないとなると、実力でいくしかない。キースも序盤である以上、戦闘経験は少ないはず。となれば、強い術でゴリ押ししてしまうというのも、手ではある。そもそも魔物の戦いって戦術次第でどうにでもなる場面も多かったけど、結局強い術を使われるとどうにもならないケースが多いよね。「答えを出す者」があれば話別だけど、そんなチートが誰にでも許されるわけではないので。

(使ってみるか？ ……ここで、あの術を……)

考えたのは、一度も使っていない術、例えばジガディラスなどの強力な呪文をここで使うこと。今のゼオンの最強呪文、これを唱えれば、キースを跡形もなく吹き飛ばせるという自信はある。それはあくまで俺個人の意見であり、「答え」じゃない。

序盤の敵に対しディオガ級呪文をぶつ放すのは、いわゆるオーバーキル行為だとは思う。思うが、「答えを出す者」が沈黙している以上、俺はゼオンを確実に勝利させる方法が思いつかない。だから強い術を使ってパートナーが来る前に倒す、なんていい加減なプランしか立てられない。

……いや、この際ジガディラスじゃなくてもいいだろ。何物騒なこ

と考えてんだ俺は。アポロに心読まれたデュフォーじゃないんだぞ。落ち着け俺、こんな建物内でジガディラス使ったら建物が崩れて俺死ぬわ。テオザケルだつていらねえよ。

さつきからなんか変だな。本調子じゃないっていうか、どつかおかしい。「答えを出す者」も微妙に使えてないみたいだし。なんで今更になって調子悪くなるんだろ？ 今まで一回も変になったことないのにな。

「……い、おい！ デュフォー！」

「ん、どうした？」

「どうしたじゃない、さつきとトドメをさすぞ」

っと、少し考え事に夢中になっていたようだ。ゼオンが手をキースに向けたまま叫んでいる。

ともあれ、キースはなんとかなりそうだ。このまま炙り殺しワンサイドゲームをするのは流石に良心がマツハなので、せめて次の一撃で楽にして差し上げよう。呪文による攻撃はかなり強烈だが、何、ちゃんと手加減するから死にはしないさ。『ラデイス』なんぞは手加減しても死にそうだが。さらばキース、永久に眠れ。なんつって。

「ザケ——」

再度雷が放たれる、その直前、頭の中で異なる種の答えが沸いた。突然「答えを出す者」が警戒を促し、詠唱を中断させる。術が来る、という漠然とした警告を。

すると、

『「バーガス・ギニスガン」！』

どこからか、呪文を唱える声が聞こえた。

直後、キースの両手から、否、指先から光が生じる。次第に形を変えた光が矢尻のような形状へと変化すると、四方八方へ勢いよく飛び出した。

答えを知った俺と、危険を鋭く察知したゼオンが動くのは同時。大きく後ろへと退いたゼオンは片手でマントを引っ張ると、掴んだ裾を俺の方目掛けて広げた。

虚空へと飛び出した矢尻は障害物に当たると、爆発も貫通もせず、

スーパーボールよろしく跳ね飛ぶ。天井の低い室内なだけあって、キースの放った光弾は複雑な軌道を描きながら襲いかかってきた。

すぐに本を抱きかかえ、ゼオンの広げたマントの中へ隠れる。すぐ直後ろで跳ねた光弾がバウンドすると、無防備な俺の背中目掛けて突撃してくるも、白い外套が防壁となつて防ぐ。マントに突き刺さるとすぐに爆発が生じ、薄皮一枚隔てた場所で起こった爆音に冷や汗を流した。

一息つく暇はない。敵の次の行動を予測できるだろうかと考えると、今度はすぐに次の答えが浮かび——あんまりな内容に絶句しかけた。

「答えを出す者」の予測は正しく、階下から聞こえた誰かの声が。

「キース！ 上だ！」

「——ッ、ゼオン！」

ああこれはヤバイ本当にやる気だよアイツもう最悪！

叫ばずとも敵の意図を察知したらしいゼオン、舌打ちすると、マントで俺を再び包み、キースから距離をとる。

しかし急な対応では充分間をとれなかった。キースが両手を頭上へ突き出すと、次の呪文が放たれた。

『「ガンズ・ギニス」！』

矢尻のような光線が大量に射出される。先ほどとは異なる呪文。再度出現した光の矢は全方位に乱れ飛ぶことはなく、さながらマシンガンのように前方へ連射される。

しかしその狙いは引き下がる俺らではなく、すぐ上の天井。明らかに攻撃する意志のない行動、光線は天井を食い破り、さらに上の階の天井を突き抜けて、やがて屋上から空へと飛び出していった。

下から乱暴に殴られた天井はすぐに崩壊が始まる。

瓦礫と化した天井の破片が雨あられと床に降り注ぎ、忌々しげに顔を歪めつつゼオンは数歩引き下がった。

「……逃げたか」

ややあつて。瓦礫の落下が収まれば、粉塵が舞う中、キースが立っていたところに人影は見当たらなかった。先ほどぶち抜いた穴から

飛び降りたのか、それともどこかに隠れたのか。……うん、どう考えても前者だな。下の階にいたはずのベルンも姿が見えない。あそこでの呪文唱えたつてことは下から見える位置にいたはずなんだけど。逃げ足が早い。

どこからかサイレンの音が聞こえてくる。火災だと聞きつけた消防車が来たらしい。ゼオンはそんなのお構いなしに追いかけて倒す気満々なようで、おい何をモタモタしているとつとつとぶち転がしに行くぞとばかりに目で俺を急かしている。それにしてもこのゼオン、ノリノリである。

今から追いかければ一分とかならない。キースは身動きに支障が出る程度にはダメージを受けている状態だし、ゼオンは無傷。多少疲れてはいるが、俺もほぼ無事だし、走れなくもない。こっちはザケル二発しか使っておらず、対してこちらは「ガンズ・ギニス」と「バーガス・ギニスガン」の二つ。下級呪文しか使っていない分、余力は残されている。

なのだが、

パタン、と。

本を閉じて、息をついた。

「……、デュフォー、どうした」

途端に怪訝な顔になる。今すぐにも追撃に移ろうとしていたゼオンは、出鼻を挫かれ再び不機嫌を漂わせる。

今気づいたけど、ゼオンってすごい分かりやすい性格だよな。ちよつとでも意にそぐわない事が起きると顔が不機嫌になる。

「地元の消防隊が来ている。じきここも見つかるだろう、今のうちに撤退すべきだ」

「だからなんだ、あの程度の雑魚を倒すのに時間などかからん」

「まだあるぞ」

「……、まだあるのか？」

「もう術が使えない」

先程まで溢れんばかりの光を放っていた本は、嘘だったかのように沈黙している。心の力が枯渇してしまっている。前向きに戦おうしていた、さつきまでの衝動が薄れていた。

心の力が尽きるのがかなり早い。ザケル二発しか撃てないって……とんでもなく心の力少ないな。

まあ、序盤じゃこんなもんか。最初ガツシユだって一日に数回しかザケル唱えられなかったもんな。

特別特訓もしていない今の俺じゃまだ2、3回しか唱えられない。回復している間に逃げられるのがオチだろう。え、回復しながら追いかけるって？ ハハハ無茶をおっしゃる。

折角のところで水を差された気分 of ゼオンは、たいそうご立腹らしかった。牙のような鋭い歯を剥いて派手に舌打ちをする。

「クソッ！ 興奮めもいとところだ、わざわざ現れた敵にトドメをさせずに帰るなんてな」

「ゼオン」

「分かっている！」

ガン、と拳を壁に叩きつけた。ミシミシと悲鳴を上げる亀裂が入った壁が、ゼオンの押し留めた感情がどれほど強いか物語っている。傍らに立っているだけで、先ほどとは比べ物にならない怒気が伝わってきた。

その気持ちは、考えずとも分かる。ゼオンが抱いているのは不快でも怒りでもなく、生まれてこのかた感じたことがないであろう、もどかしさ。

自由に行動できず、全力で戦うこともできない。人目を気にし、慎重な行動を努め、それでいて敵を必ず倒す。

なんと不自由なことか。

彼は、果たして理解できているのだろうか。人間と共に戦っていく以上、必ず魔物との差を意識し、彼我の性質の差を考慮しながら戦わねばならないことを。妥協では済まされれない、心の底から人間を認め、人間の力に納得し、己の隣に立つ存在だと了承できるのか。

できるできないの問題じゃなく、やらねばならない。さもなければ、



いずれは軋轢を生み、崩壊するのは目に見えている。

ゼオン。お前はこれから自分以外のものと戦っていかなくてはならない。不自由という鎖に縛られながらも、自分だけではなく周囲も意識し続けなければならない。お前にとっては何事もなく腹の立つことかもしれないが、王になるには必要な――

「……は」

考えていたところで、乾いた笑みが出た。

口に出していなくて良かったよ。こんな口上並べたつてゼオンは納得しないし、偉そうなご高説できる立場なんかじゃない。

まるで他人事のように考える俺こそが、一番束縛されているのに。一番何も分かってなくせに。

少なくとも、俺はこの時を振り返る度、後悔の念とともに強く思う。

「魔物との最初の遭遇は、中途半端なまま終わりを迎えた。」

「アレで良かったのか？ キース」

建物からすこし離れた位置にある公園まで辿り着き、キースのパートナー、ベルンは一息つく。

仕事の打ち合わせが延びたせいで、合流予定の時間に遅れてしまい、渋滞に巻き込まれた。途中で徒歩に切り替えたベルンが耳にしたのは、街中で暴れる二人の男の話。

片や金髪の青年、片や奇声を上げながら腕を伸ばす変な男。

その話を聞いて、すぐさま己のパートナーと気づいてしまったベルンは、急ぎ足で騒ぎの中心へと向かった。とある店で火災報知器が作動したらしく、街中を消防車が走行しているのを見、後に続いた。あとは遅れて現場に到着したところで裏口から入り込み、直後に電撃の音を聞いたところで、魔本を引っ張り出して術を唱えた、というわけ

だった。

少なからず罪悪感があったのか、顔色が優れない。しかしキースはさして気に留めた様子もなく、腹のあたりから葉巻を取り出した。

「構わん。まともに相対したところで勝機は薄かったんだ、無駄にあって機を逃すよりはいい」

「お前がそれだけ評価する相手なのか」

「王族の中でも、一際強い雷の力を授かって生を受けた者がいる。幼少の頃より英才教育を施されし雷帝。名は『ゼオン』と言い、残酷かつ冷酷な雷の使い手と聞いていた。その姿を見たことはなかったが……」

まさか早々に出くわすとはな、とキースは紫煙を吐いた。

自信過剰なキースがこうまで評価する相手。電撃の音が聞こえたのはベルンも耳にしている。

相手にもパートナーがいただろうに、よく生き残っていられたものだ。改めて己の魔物の、もとい、魔物の強さ凄さを実感するベルンであつた。

「ところでベルン。貴様一体どこをほつつき歩いていたんだ、お陰で無駄な怪我をしてしまったじゃないか」

「そう言うな。お前たちに関係があるようなモノを見つけたんだ」

お前たち……？ と首をひねるキース。ベルンはベンチへ腰を下ろすと、片手に持っていた鞆を地面に置いた。随分重たいモノを入れていたらしく、地面にぶつかる音を立てた。

キースが見つめている先で、ベルンは鞆を開く。  
すると、

「キース。お前、この石版に見覚えはあるか？」

巨大な石版。

描かれているのは、椅子に座った魔物の絵。

物語は進む。  
本来あるべき形とは、異なつたまま。

## 第五話 日々平和

夜を長く感じるようになったのは、いつのことだろうか。

時々。持て余すくらい時間があると、ごろりと横になって空を見あげたくなる。

広く果てまで続く空を見て、自分というちっぽけな存在とのスケールの違いを目の当たりにして、自分の矮小さとか、抱く悩みの小ささとか、そういうのに改めて気づくものなんだとか。

今も、そんなノスタルジックな気分浸っている。

白い、見慣れた天井から、青く澄み渡る空に手を伸ばせることの、なんと幸せなことか。

思えば随分、遠いところまで来たものだ。

差ほど時間の流れを感じなかったのは、まだ魔物という存在を知って間もないからか。数年あまりの迫つ苦しい施設内生活は、とても長かった。

自分の手を見る。いつか見たものとは異なる、白い素肌と少しごつごつした手。異国人のそれと思うあたり、俺はかつて美白とは縁遠い人種だったらしい。

そう、らしい。

そう、思う。

——昔、俺はどうだった？

軽く、指を丸めて拳をつくる。それからゆっくりと開いていき、また折りたたんでいく。調子を確かめるように、ゆっくり、静かに。俺の手だ。

今の、俺の身体。

仮初の、人の身体。

「う……っ！」

こめかみを中心に鋭い頭痛が走る。頭を抱えてうずくまり、おさまるのを待つ。頭を掻きむしりたくなる衝動を懸命におさえ、こみ上げる不快感が煽る吐き気をこらえる。

滝のように吹き出した汗がシーツに染みを作り、流れる雫が臉にまで届いた。視界の歪みにさえ意識を避けず、苦悶の音が隣人に聞こえぬようにするのが精一杯だった。

やがて痛みの波が引いていく。それにつれ、徐々に視界と意識がクリアになっていく。

「——はっ、はあ……くそっ」

ようやく一息。身体の内側にたまった熱ごと吐き出した。

未だ熱を持つ額を冷えた手で押さえながら、暗い天井を見上げて思う。

俺は、どうしてここにいるんだろう？

生まれ変わって五年は経った。今頃になって疑問に思うとは。目の前の出来事を平然と受け入れた自分の神経がおかしいのか、それとも俺の魂を世界が許容したからなのか。

若干妄想気味な考えである。しかしここがどんな世界なのかを思えば、妄想も少し現実味を帯びてきそうだ。

時間があれば、時折思うことがある。

昔の俺は、どうだったろうか。

人であり、男だったろうか、普通の家庭に生まれ、普通の生活に満足し、普通の人生を歩んでいた……はずだ。

全部、断言できない。

何故なら、俺が俺であったことを証明するものが、何一つないからだ。

もう俺は思い出せない。己がどんな人間だったのか、どういう風に生きてきたのか。これっぽっちも思い出せない。

あるいは考えないようにしていただけか。都合の悪いことから目を背けて、なってしまうものは仕方ないと割り切ったフリをして。背後に置き去りにしてきた落し物の存在を忘却して。

「なんでだろうなあ……」

知りたいのだろうか、俺は。

昔の自分のことを。もう取り戻せないかつての自分を。

昔の自分、本当の自分。それがどういう存在なのか、どんな人間

だったのか。

その疑問に対する『答え』はどうか、知りたくなかった。

## 第五話 日々平和

——拝啓。この世のどこかで平和ヅラして生きているであろうお母様。

私は元気です。

どれくらい元気かというと、ストレス溜まりまくってイライラしているゼオンにサービスと称してマッサージをしてあげるくらいには元気です。頭のマッサージは格別なんですってね。今度会う機会があつたらしてあげますので楽しみに待つてろよコラ。テメエ息子売つ払つて呑気に生きていられるわけねえだろふザケルなよそんな時には電気ショックもサービスしたるわボク

……失礼しました。近頃、何かと物騒ですので、背後からの熱い電撃、もとい、不審者にはせいぜいお気を付け下さい。ええ、本当にね。時に私、最近とみに思うことがございまして。以前の私はどんな子だったのでしょうか？ え、知らねーよって？ んなこたあ分かってんじやい。無駄だと分かってたつて聞かなきゃ気が済まないことだつて世の中にはあんだよコンチクショウ。

さて、そんなどうでもいい前置きはともかく。最近はずつたり自堕落マイペースな生活を送れてません。原因は同居人のせいです。9割がたそうです。残り一割は俺の悪ふざけによる悪影響を考慮してマイナス修正してあります。

なんでもその子は魔界からやって来たとか。良い空気吸つてるワケじゃないですよ、マジなんです。証拠提示しろなんて言ったら容赦

なく電撃ぶちかまします。

あ、今もその子といっしょです。隣でうつ伏せになって寝ています。ハイそこ、隙あらば「（↑、○、↓）」とかやらない。地面の上で寝っ転がってるだけです。よっぽど疲れたんでしようねー。頭のツボから煙がプスプス上がっているが俺は悪くない。俺は仕方なく！ 嫌々ながらも！ 本人のためを思っ！ やったんですようんそうなんです。

仲が悪いように聞こえるかもしれませんが、ゼオンとも今のところうまくやっついていけていますし、それなりにコミュニケーションもとれるようになりました。気難しいヤツですが、決して馬鹿ではないので、彼も彼なりにこちらに気を使っているんじゃないかという希望的観測が多少なりともあつたら良いのにね。いつぺん人間になつてみるよつて思つた某金髪ロールの言葉が身に染みますよ。

ともあれ、私は元気です。身辺整理が終わり次第、色々なところへ旅に出てみたいと思っております。今まで狭いところに閉じ込められていたので、もつと視野を広げたいのです。

いつか会いに行くかもしれないのでその時をせいぜい楽しみにしてやがって下さい。



そんなこんなで。

あつという間に一ヶ月が経った。

時間の経過というのはあつという間ですね。昔の一年と今の一年って長さが違うくない？ ってよく思うよね。アレって人生の長さとか関係があるらしい。子供のうちは人生十数年のうちの一年だけと、大人になると人生何十年かの一年だから、今まで生きた年月と比較すると一年って短いよね、だから早く感じるんだ、ってこととか。なんかもつともらしいこと言っ！ 誤魔化してる感が漂うけれど一応事実だから仕方ないね。「答えを出す者」だつてわかんないもんはわかんないんです。

その一ヶ月で魔物と遭遇したのはキースのアレ一回ポツキリで、それ以降誰とも遭遇していない。魔物とは戦う運命なんて言われてるけど、世界がこれだけ広いとそりゃ簡単には遭遇できないか。それとも謎の運命力がゼオンから皆を遠ざけているんだろうか。

ゼオンはというと、キースを取り逃がしたことがそれなりに不満だったらしい。今日も憂き晴らしにどこかへと外出している。修行しろよ。お前修行嫌いじゃないとか言ってたじゃねーか。

まあ、毎日厳しい訓練をする必要はないんだけど。

ゼオンは下地がきちんとできている分、後付けは少なくて済む。後はツボ押しやら特殊メニューやら伸ばす方向性を示し整えるだけでいい。もちろん肉体なんて鍛えていなければあつという間に衰えていくから、簡単なトレーニングは欠かせない。元々訓練を受けていた身である、それくらいは理解できているようで、陰でこっそり筋トレしているのを目撃している。人前で努力するのは恥ずかしい系かい。

目下、ゼオンに必要とされるのは、魔力感知と、瞬間移動だ。そのための練習は今の時点から継続してやらないと、後々困ったことになる。主にファワードあたりで。団体行動ができないゼオン君がどうやってファワードの中に入り込むんでしょね。だから必須なわけである。

本人も有用性に理解は及んでいるので、そのための訓練時間を別枠で設けている。

『瞬間移動』は時間と空間座標を計算する必要がある。某ですのーを参考に1次元がどうかこうとか小難しい知識と技術を「答えを出す者」が提示したのでゼオンにそのままありのままをまるっと伝授したら、オーバーヒートしてウヌウとか言い始めたので冷蔵庫に叩き込んで冷却した。冷蔵庫は良いね、人類の生み出した極致ってやつだよ。違うか。

そしてきつき試しにやってみると促したところ、瞬間移動もどきが使えた。え？ なんでもどきなのかって？ そら安全を考慮して10メートルの距離を動いただけです。いきなり長距離移動なんて自殺行為は許しません。うっかり着地点の壁と合体とか嫌だからね。



ゼオンは瞬間移動ができるようになってビックリしていたが俺もビックリした。まさか本当にできるようになるかとわーなんて素直な感想を述べたら殴りかかってきたので取っ組み合いになった。

10メートルのワープ。これだと素でやっている高速移動と何ら変わらない。少なからず移動に魔力を消費している分、疲労の具合が異なるから本人も微妙な表情をしていた。もともと、訓練初めて一週間も経ってないのにもう実行できているから、上出来と言える。ゆくゆくはキロ単位での移動を可能にしたいところだ。魔物つてパスポートどころか戸籍ねーから身元疑われるとアウトだから飛行機乗れないんだよね。そういうバリーやキースってどうやって移動してたんだ。不思議不思議。

さ。瞬間移動が使えるようになったら、後は訓練の継続だ。

と言っても、魔界にいた頃のスパルタ教育だとゼオンも辛かろう。そんな俺の配慮もあって、方向性を変えた新たな特訓が始まった。

訓練の方法も至ってシンプル。まず瞬発力の訓練だが、魔本を木に吊るして下で焚き火をする俺をゼオンが必死こいて止めるというものだ。え？ パートナーは本を燃やせないルールだつて？ 失礼なことを言うな。俺は本は燃やしてないぞ。ただちよつと唐突に焼き芋が食いたくなって邪魔しようとしてきたゼオンを止めただけのことだ。この特訓によって俊敏性を高めることができたと思われる。ヘイト値も高まった気がするが何、気にすることはない。

次に耐久性の訓練だ。これもまたとても簡単である。獅子の子落しという伝承に基づき、ゼオンを崖の上に立たせて背中にタックルするだけの簡単なお仕事である。あーと声を上げて落ちていったゼオンに涙しつつさっさと家に戻った。熊に襲われないかが心配だったが、よく考えたら熊どころかテイラノサウルスも一撃で倒しそうなゼオンなんだからその必要はないよねつてことでとつと俺は寝ることにした。なお、夕方に怒り心頭の子供が山で暴れまわっているとの噂を聞いて現地へと乗り込んだら怪しい人影に襲われたので地獄車で黙らせた。ちなみに夕飯は熊鍋であった。

そんな楽しい楽しい毎日が続いたんだが、ある時疑問を抱いたの

か、ゼオンがこんなんでホントに強くなれるのかと訪ねてきた。もちろんだともこの俺が嘘をつくとも思うてかハハハと爽やかに言ったらゴミ虫でも見るかのような目をしてた。

——この時、ゼオンは逡巡した。確かに成果が出ているとも言える。事実、瞬間移動や魔力探知など、戦いに必要不可欠な能力が備わり、術も強力になっている。全てはデュフォーのお陰である、しかしこんな頭の悪い訓練で果たして強くなり、王になれるのか。今更になつて心配になつてゼオンは、選択を迫られた。

つよくなれるなら しかたないな

こんなこと もうできるわけがない

ニアころしてでも やめさせる

結果、俺がリビングで一息ついているところに窓からダイナミックエントリーしてきたゼオンがそのまま馬乗りになつて俺が泣くまで殴るのをやめない態勢に入ったのだが、答えを読んだ俺が情け容赦ないカウンタラリアットで撃沈させた後反省の儀に入った。ちなみに反省の儀とは、ロープで縛つて崖に三日間吊るすもので反省してなかつたら再度大車輪ブーストマグナムをしたあとまた吊るす、というものである。

後日、ゼオンは愚痴をこぼしつつも特訓を続けるようになった。時折ガツシュを睨むような目つきで俺を見ているが俺は厳格な父のよくな想いで修行に臨むのであった。ううむ、我ながら嘘くさい。

まあ、修行の成果が目に見えて現れているからこそ、本人も妥協できているところもあるんだけどね。頭のツボ押しされたり崖から蹴落とされたり逆さ吊りにされたりと人間界に来てからロクな目に遭つてないねゼオンって。俺のせいかな。でもしょうがないよね、これも全て「答えを出す者」が悪い。俺は悪くねえー。

そんな日も続き、そろそろひと段落かという頃になって、ゆっくり考える時間もできた頃。

柄にもなく神妙な顔にならざるを得ない事態が起きた。

どうしたらゼオンを王にできるのか——その答えが、一向に出ない。

ただ勝てば良い、なんて単純明快なこと考えるヤツはいるまい。後半になれば魔物一体一体の実力は跳ね上がる。一対一で負けるとは思えないが、ガツシュ達のように複数で行動する魔物と相対した際、窮地に陥るのも、ないと言い切れない。

そういった事態に備えて、今から対策の一つ二つ用意しようかと思いい、多人数戦闘でのシミュレーションでもと考えついた時、ようやく俺はその疑問に至った。

ゼオンを王にするには、原作通りの流れに沿う形をとるならば、ガツシュと戦い、これに勝利せねばならない。ゼオンの目的からして、決して避けられない運命の分かれ道となる。

客観的に見て、あの時のゼオンとガツシュの実力は大きな差があった。ゼオンとデュフォーの心境の変化があつてこそ、という見方も、でないもない。もちろんバオウの、ひいてはガツシュ自身の成長があつたから、とも思えなくもない。ただ実際目の当たりにした分、ゼオンが負けるのだろうか、って思っただけ。

慢心を捨て、ガツシュを敵と認めた上で、全力の勝負に徹する。少なくとも、そうすればガツシュに遅れをとるとは考えづらいんだが……

どうすればいい？ と半ば思考を投げ捨てた問を送ったのだけけれど、「答えを出す者」は不気味な沈黙をもって応えるのみ。

というか、そもそも。

ここんところ、「答えを出す者」が安定しない。

戦闘中は精度が高く、答えは若干のラグを残しつつも提示される。それもまた妙なんだがこの際置いておこう。

普段「答えを出す者」を使おうとすると、常識的な問いでさえ「答え」が出ないこともしばしば見受けられる。

前々から疑問に思っていたことがある。あらゆる謎を解き明かす「答えを出す者」という能力。自分の中で最早あって当たり前になりつつあるこの力。

どれだけ力が及ぶのだろうか。

どの程度答えられる？ どれほどの精度？

あらゆる疑問をほぼ解き明かす万能な力。それは、決して全能じゃない。清麿が使いこなすのに時間を要したように、デユフオーがバードレルゴを見抜けなかったように。何事にも限りつてものがある。

人間の心理。常に変動する未来。そういったモノは全て、「答えを出す者」をもってしても明確な答えを出せない。

けれども、これぐらいは。その程度なら分かるんじゃないかという問いや謎さえ、「答え」を出してはくれない。いや、くれなかった。それがこの間ので、よく分かった。

どうしてだろう。こんなことは初めてだ。ゼオンと出会う前と、それから少しの間までは、何ら異常もなく機能していたというのに。

思えば研究所にいた頃は楽だった。なんでもかんでもちよつと頭を動かせば、俺では一生かかっても分からない問題も瞬時に答えが書けた。不謹慎な話ではあるが、一種の爽快感があった。誰にも解けないものを、俺だけが解き明かせるんだという、傲慢に満ちた優越感も。「うーん、分からん」

まだひと月と経っていないのに、不安の種が見えてくるとは。清麿みたいに変な夢見て朝起きたら消えていました系のオチは勘弁して欲しい。「答えを出す者」がなくなったらマジでどう戦えばいいか分からん。原作知識なんてハッキリ言ってアテにならないし。

誰かに相談できれば、楽だったんだけどな。同じ能力を持った奴がいれば解決策が浮かぶだろうけど、生憎清麿は一度死んだ後一時的に覚醒しただけ。今の時点では片鱗すら窺えない。

だとすると、もう俺自身で訓練を積み重ねて、安定させるしかないだろう。薬物や機材を使った安定化は凶れないので、自力で操作してならしていくほかない。

もしかしたら、脳に過負荷をかけないよう本能的にセーブをかけているだけかもしれないし。施設の中で体調を完備させられていたから、今になって影響が出ているかもだし。

ゼオンのこともそうだが、同時に俺の方もなんとかしていかないといけない。「答え」が分からないからって動揺していたら、この先戦いの中で生き延びることができなくなっちゃうし。まずは身体を鍛えて、自分の能力を使いこなせるようになって、ゼオンと信頼関係を築いて

——本当に、ゼオンは俺を助けてくれるのか？

「……………いや、済んだ話だ」

俺の問題が戦いに支障をきたしては困る。「答えを出す者」は俺にとっての唯一の生命線だ。原作知識なんて、いつ改変するか分からないあやふやなモノに依存したままでは駄目だ。不安定になりつつある「答えを出す者」を安定化させ、俺自身の心の力の容量を上げる。やることは山積みだ。

ザケルをたった2、3回しか使えない程度じゃお話にならない。せめて上級呪文を行使してもまだ余力があるくらいにまで持っていないと、いずれ現れるギガノ級やラージア級呪文の使い手に苦戦しかねない。

「答えを出す者」が完調なら問題はなかったのにな。ほんと、愚痴りたくなるよ。

「——、ん？ ゼオンが帰ってきたか」

物音がし、扉を開けてゼオンが入ってきた。瞬間移動を使えるようになったものの、家の外に着地させるようにしている。いきなり家の中に飛び込まれるとビックリするから、という実にしようもない理由だが。

「お帰り」

「ああ」

短い返答。目線も寄越さず、声をかけられたから何か言い返した、というレベルの返事。

傍から見れば仲は良好とは言いがたいが、これでもゼオンとの関係は今のところ悪くない。出会った当初はほとんど答えてくれなかった。帰って来た時におかえりって言ってもスルーだった。それと比べれば、ゼオンもちよつとだけ、刺が抜けてきているように思えた。

今はゆっくり考えよう。時間があるこの序盤のうちに、ゆっくり消化していけばいい。ゼオンも俺もまだまだ未熟、急激に変わるはずもない。だからこそ、何事も順序建てて、一つ一つ目の前にことにあたっていけばいい。まだ先は長いのだから。

新たに魔物を発見したのは、その翌日のことだった。

## 第六話 ロツプス

「——悪いが、逃がしはしない。おまえらのように甘いヤツを見ると、とことんまでぶつ潰したくなる」

某日。ふらりと立ち寄った、オランダの街にて。

ゼオンと共に諸国を巡っていた俺は、新たな魔物と遭遇した。

発見したのは、見覚えのある二人。非常に小柄な魔物と、外套を羽織った青年が、ゼオンと相対している。

片や金髪の青年、片やてんとう虫を彷彿とさせる外見の魔物。

アポロとロツプス。

序盤でガツシユ達と戦い、互角の勝負を演じた相手。

うん、まあなんとなく予想はついてたんだけどね。誰かと遭遇するんじゃないかなーって。

事の経緯は、もう予想はついてるし『答え』が出ている。街中をフラフラしていた二人とゼオンがばったりニアミス。魔物の位置を知できるゼオンがわざわざ出向いたわけではなく、原作同様、道を歩いていた時声をかけられ、その後立ち去ろうとしたアポロを甘いと評したゼオンが喧嘩をふっかけた、なんて流れ。

ただ俺の知っているものと異なり、彼らはガツシユとは交戦していないらしい。ただ偶然、旅の途中でふらりと立ち寄ったこの街で自由を満喫していただけ。その最中、魔物の力を感じ取り、退散を決め込んだアポロだったが、運悪くゼオンとかち合ってしまったい……

なんつーか、もうご愁傷様としか言えん。

ゼオンのやつめ、すれ違う魔物にやたら喧嘩売ってんじゃねえよ。俺がのんびりホットドッグ食いながら現地の人と談笑していたってのに。訴訟も辞さないでゲスよ。あと指パッチンで俺を呼ぶな。俺はギャルソンじゃねえ。

(しかしアポロか。随分早い登場だなあ)

俺の知っている原作とかなり時系列にズレがないか？ アポロとゼオンが遭遇するのは、少なくともガツシユが清磨の父がいるイギリスへ赴き、帰国した後のことだ。

まだゼオンはガツシユの記憶を奪っていないし、バルトロをけしかけてもいないし、そもそも時期的にガツシユと清磨はまだ出会っていないハズ。全て前倒しになってきている感がするが、気のせいだろうか。

……ふむ。どうやら俺の出現で少々流れに変化が出ているものの、概ね原作通りらしい。どうやら『原作』という根幹を揺らがさない程度の誤差は許されるようだ。

ちゃんと答えてくれてありがとう「答えを出す者」。頼むから毎回仕事してください。

「……………ッ！」

見てください、あのアポロ君の表情を。まるで得体の知れない人間と戦わざるを得ないと確信しているかのような顔です。いやもう我が事ながらバツチリそうなんだけどね。実質初対面の相手にこうも睨みつけられると気圧されてしまう。どうにも相手方もやる気が漲っている感が漂っているのが分かる。そんな顔で俺を見るな。

ちよつと忘れてきているけど、清磨と出会った当初のアポロは、確かに良きライバルになりそうな雰囲気だったし、どこか得体の知れない強さを感じられた。次に出会った時にはロツプス消えちゃったのは色々と衝撃。初登場時の強キャラっぽさはどこいつちやつたんでしょうね。

この世界に来て結構経つが、未だに原作キャラとどう接すればいいのか分からないんだよなあ。キースは運が良いのか悪いのか取り逃がした、しかし今回はそうもいかない。ゼオンだけやる気その気大好きだったら良かった。それに応じてしまったのか、アポロもロツプスも臨戦態勢に入ってしまったっている。売られた喧嘩は買ってやるぜ！  
みたいなお顔。頼むから遠慮してくれ。

ひとまず街中で戦うのは避けたいと述べるアポロの提案を、機嫌よ



く承諾するゼオン。ようやっと見つけた新しい獲物を逃さないという思惑と、とにかく戦えるのならどこであろうと構わないという私情があるから。道を行き交う人間なんて路傍の石も同然であるゼオンは、すぐにでも襲いかかりそうなくらい疼いている身体を押しとどめているのが後ろから見ていて伝わった。英語で言う『ステイ』状態。尻尾があれば振っていたことだろう。

うむ。

さあ、困ったことになったぞ。

前回のように、途中で見逃すなんて荒業は使えない。アポロもロップスも戦う意志を変えやしない。こちらから戦う姿勢を見せたのに、今更やっぱナシで、なんて通じるものか。そんなことしたらゼオンに何されるか分からんし。

ん？ 待てよ。

ひよっとして、アポロとロップスは倒してしまっても問題ないんじゃないだろうか。

どの道、ロップスは脱落組だ。邂逅編にてゼオンと戦い、敗北する。その流れを再現するのであれば、別段俺が避けて通る必要もない。物語における重要なキーパーソンという雰囲気ではないし。少なくともロップスはな。アポロは資金面での援助が……あれ？ これってただの金づりいやなんでもない。これは彼の名誉を傷つけることになってしまう。

史実通りの流れに添えるか微妙だけど、もう戦いは避けられない以上、俺は身を委ねる他ない。

うん。

やろう。

アポロには悪いが、修行の成果を試せる良い機会である。いかんせん実戦経験が俺もゼオンも足りない。負ける気なんてサラサラ無いけどな。前回のような不甲斐ない結果に終わっては術の力を試せないし、経験も得られない。少なくとも、これでようやく魔物の術を使った戦いつてやつができそうだ。

全ては筋書き通り。あとは戦って勝っただけである。

負けるつもりは無いけどな。

## 第六話 ロップス

町外れに資材置き場がある。老朽化していた風車の工事に用意された木材がいくらか点在していて、古びた風車が風を受けて軋みを上げながら回転している。ここはアレか、ゼオンとアポロが対戦した場所か。キースん時は違ったけど、

広いフィールドだ。戦うには絶好の場所だろう。街へ入る前に調べておいたのか。さすがはアポロ、抜け目がない。

「まずは力を見せてもらおうぞ！ 『リグロン』！」

まずは様子見とばかりに、アポロが呪文を唱えた。

ロップスの手からロープが伸びると、近くに放置されていた建築用の木材に絡みつく。まるで重さを感じないかのように軽々と持ち上げると、まとめて一気にブン投げた。

……これは、当たらないな。史実通りの展開だ。様子見の先制打なら、避ける必要はない。

ゼオンも確信があるらしく、微動だにしない。俺とゼオンが動かないことに動揺を示したのはむしろアポロの方だった。てつきり回避すると思っていたのか。

数秒後、木材が周囲に着弾する。真横数センチという場所に幾つも木材が突き刺さる。衝撃が全身に襲うが、目立つ傷もなくかすりもしない。

「ブン……やる気があるのか、貴様ら？」

本当に当てる気が無いと直感していたゼオンは、涼しい顔で佇んでいる。俺と違って「答えを出す者」がなくても、長い戦闘訓練によって研ぎ澄まされた勘は並大抵のものじゃない。

俺は内心心臓バツクバクだけどね。冷や汗出さないようにするの  
で精一杯だけど。何が顔色一つ変えずにだ、単純にビツクリして驚く  
暇がねえだけだったの。

前々から思ってたけど、『リグロン』つてファウード体内とか空中だ  
と無力だよ。投げる物体ない場所とか、掴むモノが無い場所とかは  
特に。相手にロープ投げる以外選択肢がほとんど無いじゃないか。

そもそも、投げるモノによって威力が変動するなんて特徴、誰がど  
う見ても致命的欠陥だろう。運要素の高い術で投擲する物体に攻撃  
力は依存する……うん、扱いつらいことこの上ない。

だが考えてみて欲しい。物体に依存するということは、投げ放った  
物体は魔力の供給が途絶えても、半永久的にその場に留まり続ける、  
ということ。

例えば今のように木材を投げれば、突き刺さった状態のまま放置し  
ておくと厄介な障害物になる。例えば自動車をブン投げた場合、その  
場に衝撃と破片による殺傷、おまけに爆発のおまけ付きと、複数の追  
加効果を狙える。

ロープは攻撃以外にも移動や回避、相手の束縛など、その用途は多  
岐にわたる。ただ相手を闇雲に攻撃するだけなら他の術の下位互換  
でしかない。それは使い手が一番理解しているはず。

物事は思い描いた理想ほど上手く運ばない。

しかし全ては使いようだ。使い手の発想力次第で無限の可能性を  
発揮する。そしてそれを可能にするのが、このアポロという男だ。並  
大抵の魔物なら歯が立たず軽くあしらわれることだろう。扱いの難  
しい術を持ちながら、ここまで生き延びただけのことはある。

ただ、今回ばかりは相手が悪かった。

「やる気がないなら……すぐにでも本を燃やさせてもらうぜ！」

さあ、思い知るがいい。

下手に積み上げた小細工など、結局は激流の前に塵と等しく消し流  
されるのが運命なのだ。なんつって。

『ザケル』！」

電撃。

度重なるツボ押し、そして肉体的・精神的トレーニングにより、呪文の威力は更に上昇している。すべての文章を読めるまでは至らなかったものの、使い始めの頃より速度が上がっている。

何より、俺自身が心の力の使い勝手を、少しずつ把握できていることも大きく作用している。適当な量の力を、適度な感情をもって行使する。ただそれだけ、それだけだというのに、この差である。

逆る稲妻。初期の呪文にしては、かなりの威力を孕む電撃は、予期していた通りに見事回避される。ザケルの電撃を放つと同時にアポロはロップスを抱えて横に跳んでいる。物怖じせずに回避に移れる度胸は見上げたものだ。

しかし虚空へ突き抜けた電撃はそのまま直進、アポロの背後に建っている風車へぶち当たった。

破碎する。木造建築の風車は見事粉碎され、破片となって落下する。何十何百という木々の欠片が、アポロの頭上へ殺到する。

驚きは一瞬。しかしそれは驚愕というより感嘆の類であり、下手をすれば死につながる状況に身を置きながらも、冷静に動いていた。

がらがらと音を立てて崩れ落ちる風車の破片。その落下軌道を読み、着弾地点を推測。まるでさながら未来予知の如く、アポロは降り注ぐ破片を軽いステップが回避していく。時に大きな挙動で、時に紙一重の位置で。目立った外傷もなく、この危険を突破した。

「僕には通用しないよ」

不敵に笑むアポロ。その顔に焦りはなく、どこか余裕が感じられた。

やはりザケル程度じゃ避けられてしまうか。動きを予測して避けられる才能も凄いけど、電撃を見てから避けるアポロの反射神経も大概だなこれ。

『リグロン』！

と、俺が惚けている間に、狙いを俺へ定めたアポロが呪文を放つ。ロープが蛇のようになねり、本を奪おうと身を伸ばしてくる。

……ああ、これは避けきれないか。さすがに柔軟な動きができる

ロープを避けることは俺にはできないらしい。初級呪文だけに操作性は高く、スピードもなかなかだ。ゼオンから少し離れた場所にいた俺は格好の的と言える。

ただ、ゼオンを無視するのはいただけない。

「フン、このオレを無視して、直接本を狙うか」

オレもなめられたもんだな、と。

ゼオンはその場から一歩も動くことなく、ロープをすべて弾き飛ばした。

やったことは簡単だ。ロープの裾を掴んで、横手に向かって放り投げる。魔力の操作によって自在に伸縮するロープは変幻自在の盾となり、襲いかかるロープから俺を守った。

前回よりも「伸び」が良い。どうやら修行の成果がきちんと現れているようだ。ちよっと一安心。実戦でなんも変化ないじゃんと思われたら怒られるからね。

防戦から一転、そろそろ攻勢へと転じたゼオンが一気に距離を詰める。俺の目では追いきれないほど速く前進し、手さばき一つでアポロの行動を封殺する。あの手の動きって漫画だと若干意味不明だったけど、反射的に避けようとする行動を制する役目があるようだ。

アポロは逃げられない。機を見て俺は呪文を詠唱した。

『ザケル』！

『リグロン』！

が。

同時に、アポロも呪文を発動していた。ロップスにロープを伸ばさせ、身体を上空へ引き上げる。かろうじて回避に成功したアポロだったが、ゼオンはその間にも動いていた。

ロップスとを繋ぐロープに狙いを変更、素手で掴んで思いっきり引っ張り寄せる。アポロを助けるために両手を伸ばして縄を投げたいたロップスはバランスを崩し、前のめりになりつつゼオンの方へと引っ張り込まれる。

眼下の状況に気づいたアポロは慌ててロープを消すが、既に慣性に任せて吸い寄せられるロップスを止める手段はない。それでもなん

とか短い足を伸ばして踏み止まろうとする。懸命に足搔いた甲斐もあつてゼオンの元へ辿り着く前に降りれたものの、既にゼオンは目と鼻の先にまで迫っていた。

「に、逃げろロックス！」

言われるまでもなく、ロックスは背中を向けて逃げ出した。勿論ゼオンが黙って見過ごすはずもない。瞬き一つほどの間に逃走先へと回り込む。目を疑う速度で出現した敵の顔が、驚愕に歪むロックスとは対照的に、ニヤリと歪な弧を描く。

『ザケル』！」

直撃を期待して、術を撃つ。

電撃はロックスに当たるとはなかった。全力で疾走していたアポロが身体ごとタツクルを仕掛けることで、無理矢理ザケルの発射方向を変えたのだ。

彼の身を呈した行為は見事実を結び、上空へと吸い込まれている稲妻。吹き飛ばされたゼオンは不安定な体勢を空中で無理やり整え、離れた場所で着地。

相方をかばうためとはいえ、肩をかすめた電撃は生半可なものじゃなく、アポロの表情を苦痛で歪ませる。もつともダメージはそこまででないらしい、ロックスが心配そうに駆け寄ってくるも、気にするなとばかりに小さく笑う。

ふむ。

概ね俺の知る通りの展開だ。

アポロは先読みして行動し、攻撃を放っている。しかし人間の想像を超えるゼオンの動き、そして強力な電撃。向こうはゼオンのスピードと術の威力に翻弄されており、アポロとロックスは徐々にだが旗色が悪くなっている。

これまで戦ってきた魔物より数段格上の魔物との交戦。自分の力で道を切り開いてきた天才的センスを持つ青年にとって、立ちほだかる壁。それは間違いなく、今後の運命を左右する分岐テントなる。

(しかしまあ……)

前回のキース戦は、お互いが呪文を唱える交戦ではなかったから、

実際戦闘と呼べるものはこれが初となる。お互いがお互いの力をぶつけ合い、魔物は王の座をかけた真剣勝負。アポロがロップスを王にさせる気があるかどうかはともかく、力を出して全力で食らいについているのは伝わってくる。

これが俺にとつての最初の「戦闘」。

王を決める戦いを実感するに相応しい、最初の関門。

なんだ。こんなものなのか。

ただ呪文を唱え、導かれた答えを忠実に再現する。淡々と作業をこなしている感。

目の前に提示された問題を解きなさいと指示され、何のひねりも無い問いに黙々と目を通し、考える間もなく頭の中に浮かんだモノを実行に移す。忠実に、愚直に、ただただ描かれた筋書きをなぞる機械のように動くだけ。

相手の術を的確に防ぎ、出鼻を抉る牽制の術を放ち、下級呪文だけで相手を追い詰めていく。さながら詰将棋の如く、一つ一つが勝利への一歩である。

だが、そこには期待していた高揚も喜びもなく、単純作業を延々と繰り返す虚無感じみた思いが、俺の胸の中で渦を巻いていた。

改めて実感した。

温い。

温すぎる。

面白くもなんともない。

よくデュフォーは退屈にならなかつたもんだ。ゼオンに任せきりになって呪文唱えるだけだった頃を思い出す。初期から人形のような顔で術を唱えるマシーンと化していたが、確かに秀逸なスキルを持

つ彼では「退屈」だと切り捨てるのもわからなくも無い。  
物足りない。感想を簡潔に述べるなら、まさにそれだ。

アポロに期待していたからか、それともゼオンが強すぎるからか。それとも俺が運で最高の力と肉体を手に入れたせいかな。

油断はない。慢心もしない。けれどもあまりに一方的で、どれだけ頭で否定しても、やはりこみ上げてくるのは、退屈、空しさ、不満……。

結末を知っているだけに、どうしてもそういった不要な感情が拭えない。無礼だと分かりつつも、落胆の念を抱いてしまう。

「オイ、デユフォー。お前も動け。久々に面白い相手だ」

興が乗ったのか、ゼオンは楽しげに口を歪ませている。俺とは対照的に、戦いを楽しんでいる様子である。戦闘を楽しむのは珍しいって言われてなかったつけお前。結構ノリノリじゃないか。

まあ、いいや。

とっとと終わらしてしまおう。一方的に殴られる痛みと怖さを教えてやろうか、なんて俺のキャラじゃないしね。ゼオンが楽しんでいるうちに終わらそう。

「ロップス、行くぞ！ 二人から決して目を離すな！」

今まで傍観していた俺から得体の知れない怖さを察知したのか、アポロとロップスが身構える。

ただでさえ敗色濃い状況だ、アポロもなりふり構ってられなくなつたのか、狙いを俺へと定める。ゼオン越しにアポロの不安を振り払おうとする顔が見えた。

ほら、そんな怖がっていてどうするんだよ。

俺みたいな素人を露骨に警戒しているんじゃないよ。

アンタ、これまで色んな魔物に勝ってきたんだろうが。

——そんなんだから、唱える術が俺の予測通りのものになって、

『リグロセン！』

ロップスの手から新たなロープが放たれた。しかしそれは『リグロン』の比ではない。幾十もの細い縄が蛇蝎の如くうねりながら虚空へ飛び、ゼオンから離れた位置に佇む俺へと襲いかかった。

通常の『リグロン』の縄と異なり、目標を捕えるだけのものではな



い。先端部には鋭利な矛のような物体が取り付けられている。相手を切り刻む殺傷性の高い刃だ。ギリリと輝く矛は、魔物には小さなダメージしか与えられずとも、人間には死に直結する脅威。

……ああ、これは当てるつもりなんだな。そろそろ本格的にヤバイと察したんだろう。

切り替えが早いのは流石の一言だが、もうちよつと早いうちに本気を出すべきだったろうに。

遠く離れた位置にいるパートナーを助けに入るには、斜線上に割り込み相殺するか、防御呪文で防ぐほかない。

しかし、ゼオンは傍らを通過する縄を、愉しげに見送った。てつきり魔物が助けに入ると思っていたアポロは一瞬怪訝になる。

おいおい、さすがにこんなの直撃したらお陀仏だぞ。ゼオンの奴、助ける気がねえな？

それとも、見せてみる、とでも言うんか。俺の実力とやらを。実戦でどれほど動けるのか、見定めてやると。

いいさ、やってやるよ。

ちよつと怖いけれどな。

迫り来る矛の雨。その隙間はほんのわずか、子供一人が抜けられるかどうかといった程度。真正面から突き進めば瞬く間に細切れにされてしまうだろう。

けど、全部が同時に襲い掛かるわけじゃない。一つ一つの攻撃は時間差で着弾する。相手に避けられることをある程度想定し、防がれたならば後続を操作することで隙間から当てる算段なのだろう。

とはいえ

攻撃の軌道を教えてくれるなら、あとは実行するだけ。

——そんなんだから、攻撃パターンが短調になって、

「な……っ!？」

明らかに動揺した気配。最初の『リグロン』とは違って、人間相手でも容赦なく殺す一撃だった。

それを容易くぐり抜ける俺に驚愕したのか、それとも顔色ひとつ変えずに直進する姿に絶句したのか。

それとも、俺が無傷で槍の雨を突破したのがそんなに驚きか。

何も難しいことじゃない。彼我の距離、術の速度、視界から捉えた術の到達予定地点。全ての情報を頭に叩き込み、どうすれば回避できる？ と考える。一刹那の後に浮かんだ最善の回避行動を何一つミスをせずに行えば、そら、無傷で避けきるのだって夢じゃないだろ？ 本来なら、俺にかすり傷の一つや二つ、負わせるくらいには成果を残すはずだった。

アポロが動揺さえしていなければな。

「答えを知る者」を使いこなしていた、俺の知るデュフォー。同じ力を持つとはいえ、その調子は完全とは言い難い俺。同じ力の使い手、同じ外見でも、その差は少なからず開いているハズ。

しかし、知識は力である。敵の性格を知り尽くし、相手の術を覚え、どのタイミングで進み、避け、唱えればよいかを、「答えを出す物」が提示する。不完全な「答え尾を出す者」の「力」を、俺自身の「力」で補佐する。

地上でただ一人、転生を果たした俺にしかできないことだ。

——そんなんだから、次の行動も予測しやすくなり、

「リツ、『リグロオン』！」

細い鎖が数本伸び、その先端に槍を輝かせている。断ち切られるロープと異なり、

アポロも焦りの中で少しは考えたらしく、全面から押し寄せた『リグロセン』とは軌道を変えた。鎖は自由自在に虚空を飛翔し、俺目掛けて突進する。上、斜め下、右、左真横から二つ。しかし焦燥しているのは事実であり、ゼオンではなく直進する俺めがけて鎖を放っていた。

これは、見たことのない呪文だった。アポロは『リグロン』『リグロセン』『ティノ・リグノオン』の三つしか呪文を取得できてなかった。これも原作とは異なる流れに沿った影響か。

ちよつと驚きだが、結局それも歩みを止めるにはほど遠い。

術の仕様や効果の一切まで分からなくても、どのように対処すれば良いのが瞬時に浮かぶ。初見の術と、未知の術と既知の術。いずれにも対策を練れる二つの力が備わっている以上、安易に足を止める必要は無い。

……ああ、成程。そうやって避ければいいのね。

迅速な「答え」に満足しながら、俺は歩を進める。上からの一本を首のひねり一つでかわし、斜め下から迫る一本をサイドステップで避ける。続いて右からの一本を大きく踏み込むことで難なくクリアし、最後の左からの一本はその場で立ち止まって見送った。

——そんなんだから、攻撃があたりなくなつて、

「こ、これも避けただと……!?!」

普段は冷静沈着であろうアポロからすっかり余裕を奪い取り、着実に距離を詰める。最初は開いていた彼我の距離が、徐々に狭められていく。

なまじ、常人より優れた頭脳と直感を持つからこそ、予想外のモノと相対した時、手に負えないモノと対面した時、動揺は強く浮かび上がる。

後退を余儀なくされるアポロは、少しずつ進んでくる俺とゼオンに意識を集中している。だから己の立ち位置を把握する余裕は、ない。

焦燥が失敗を生む。不安が停滞を生む。恐怖が心を蝕む。

たとえ完璧な『答え』が分からずとも、原作という知識の補助さえあれば、この程度、造作もない。

——そんなんだから、心の余裕が無くなってしまつて、

「ロップス、最大呪文だ! 『デイン・リグノオン』!」

追い詰められたアポロは、とうとう最強呪文を放った。

詠唱完了と同時に、ロップスの手のひらから『リグロオン』とは比べ物にならないほど太く長い多くの銀鎖が、ジャラジャラと金属音を奏でながら放射状に展開される。

その光景は、まさに圧巻の一言に尽きる。

幾条もの鎖を前方の地面へ突き刺し、大地を丸ごと引っ張り抜く。家屋さえ容易く押し潰す質量を持つであろう土の塊。巨大な質量を

誇る大地の欠片を鎖は次々に採掘し、数が五つと超えたところで敵めがけて解き放つ。

前方全てを覆い尽くした、圧迫感を与える土の壁が、唸りを上げて突き進んでくる。回避も防御も、生半可なものならば容易く飲み込み押しつぶすだろう。

いくら比類なき力を持つゼオンとて、あれだけの物体に上から押し掛かれてはひとたまりもなく、迂闊な反撃も受け付けない。前進する岩塊を呪文で砕けば、その破片がまんべんなく辺りに飛び散る。頑丈な魔物はともかく、弱い人間なら、いとも簡単に行動不能に追い込める。

ゆえに、俺たちは回避する術はなく、力には力で対抗するほかない。

だが、

見えているぞ、アポロ。

「ゼオン」

指示は単純。大した動作も必要ない。

腕を軽く上げ、指先一つで方向を示す。それだけで、ゼオンはすべての意図を察し、慌てることなく用意を整えた。

「ああ。あそこだな？」

手のひらを向ける。その先には迫り来る土の壁。静かに見据えるゼオンと俺の視界に、それは映っていないかった。

捉えているのは、その向こう側。強大な力であるがゆえに、精密なコントロールを行っている——鎖のひとつ。

『ザケル』！」

放った電撃は、岩山に比べればあまりに小さく細い。その外見とは裏腹に込められた心の力は強く太い。

電撃が岩にぶつかった。相殺することかなわず散ると思われた稲妻は、岩を食い破って反対側へと突き抜ける。敵の術と激突したことで威力が大分落ちたであろうザケルの雷だったが、しかしその責務をきちんと果たした。

岩を操作していた鎖を、雷が弾いた。

たったそれだけ。

それだけで、——攻撃の軌道がわずかに逸れる。

ガツシユとの戦いで使用したように、ひとつの岩の塊を投げつけるのであれば、俺も中級呪文を唱えざるを得なかった。

しかし複数の岩を投げつけるのであれば、話は別。

操作する鎖が動いたため、岩が本来の軌道を外れ、横へと動く。俺とゼオンをまとめて押し潰そうとしていた岩は、ひとつじゃない。すぐ横手には同じサイズの岩が飛んでいる。

ゴン、と重い鐘を打つような音が響く。岩同士が激突し、反発し合った岩がさらにほかの岩へとぶち当たる。それでも勢いは失うことはなかったものの、小さな目標へ直撃するコースからは明らかに外れてしまっている。

着弾する。派手な音を立てて地面にめり込んだ岩の数々。ほんの一步、横へと動いていたら、飛び散る破片と瓦礫によって傷を負わされていた。

だが、無傷だった。

小さな敵に大きな攻撃をぶつける。彼の選択は間違いじゃない。

それが裏目に出るとは、さしものアポロにだって予想できなかっただろう。

きちんと鍛錬を積んで魔物と戦っていけば、自然と扱えただろうに。精密なコントロールができない今では、これがやっと。

結局。

アポロとロップスは、俺たちに傷ひとつ負わすことができなかった。

「に、逃げるぞロップス！ 僕たちじゃ彼らには勝てな——」

最大術がいとも簡単に破られ、敵わないことを遅ればせながら悟ったアポロ。

しかし、

「……………どこへ逃げるんだ？」

——そんなんだから、自分の窮地に気がつかないのさ。

「なっ……いつの間!?」

すぐ背後には、先ほど倒壊した風車小屋と同じもの。俺たちを遠ざけることしか考えられなかったせいで、周囲の状況確認が疎かになっていた。

抵抗されては面倒だ。後ろに注意がいつている隙にアポロの手から空色の魔本を叩き落とし、襟首を掴んで壁に叩きつける。ロツプスが本を拾おうとするも、ゼオンに蹴り飛ばされて失敗した。

終わりだな。

結構苦戦するんじゃないかと思ってたけど、割と呆気なかったな。これならキースにも勝てたんじゃね? あん時追いかけてれば良かったかもな。いまさらになつてちよつと後悔。

「そうか……そういうことか」と。

アポロが唐突に語りだした。

ああ、そういえばデュフオーの怒りを買うシーンがあつたな。その心にどれだけの憎しみを隠しているんだ? とかなんとか。

だが残念だったな。俺に怒りも憎しみもまったくなくないし、心を読まれたって別にどつてことはない。転生者ということがバレたところで、それがなんだというのだ。自分が漫画の世界の住人だと信じるわけがないし。指摘されたところでどうってこたあないのだ。

「デュフオー、と言ったかな。君はそれほど強大な力を持ちながら——」

冷や汗を流しながらもアポロは続ける。ハイハイ、分かったから、少しの間だけでも大人しくしてくれな

——何故、正気を保ってられるんだい?

その言葉が頭の芯まで染み入った瞬間、俺の中で、何かが音を立てた。



無音が続いた。

アポロは笑みを浮かべつつも、内心冷や汗を流していた。魔本は叩き落とされ、襟首を掴まれ壁に叩きつけられている状態。自由を奪われた状態にまで追い込まれ、敗北の文字が脳裏をよぎった時、頭の中に何かが浮かんだ。

元々、アポロには相手の力を感じ取るがある。オカルトみじた超能力ではなく、目線や顔つきから相手の心情を逆手に思考を読み取り、研ぎ澄まされた感覚が危険を察知し即座の回避行動をとらせる。距離が近ければ、心の奥底に眠る感情さえも汲み取ることもできる。そういう生まれ持った力だった。

端的に述べると、アポロは「なんとなく」相手の心を読める。別段計算づくでもなければ超能力でもなく、言ってしまうえば、ただの勘。見ようによつては十分超能力じみた異能であるが、彼はその持ち前の感性と直感だけで魔物との戦いを有利に進めてきた。

と言つても、彼自身戦いを好まず、これまでそれほど多くの魔物と交戦してきたわけでもない。アメリカのとある財閥御曹司という立場から、彼は自由に生きる時間を大切にしている。そういった経緯から、騒動に自分から首を突っ込むことを控えていた。

勿論、敵は彼の事情など知ったことではないとばかりに攻めてくるため、降りかかる火の粉を振り払う手段くらいは持ち合わせている。使える術は4つと少ないものの、アポロの天才的な勘と臨機応変な対応により、敵を退けてきた。

ただ、今回は相手が悪かった。魔物と遭遇しながらも戦おうとしな  
い——見ようによつては平和ボケした呑気なスタイルを貫くアポロ  
に苛立ったのか、偶然出会った魔物から宣戦布告を受け取った。

争いを好まないとはいえ、完全に拒絶しているわけではない。アポ  
ロはやむを得ないと早々に判断を下し、人気のない場所で戦闘を開始  
した。

結果は、このザマだ。

終始全力、とは言わない。手加減は最初していた。極力他者を傷つ  
けたくないというアポロの心優しい配慮。しかし途中から、デユ  
フォーとかいう少年が動き出してからは違う。焦燥の後押しを受け、  
倒すつもりでかかった。負ける、という不安を押し隠すよう術を連発  
した。最強の呪文も出し、持てる力全てを使いこなし、全身全霊を  
もって挑んだ勝負は、相手の全力を引き出させることさえできず、呆  
気なく終わった。

だが、とアポロは己の奮い立たせる。

まだ魔本は燃やされていない。せめて、せめて時間を稼げれば、落  
ちた魔本を拾えるかもしれない——僅かな希望を見出そうと、アポロ  
は口を開いたのだ。距離が近づき、目と目の距離が縮まったことで、  
相手の思考が読み取れるようになったからこそ、最後の手段とばかり  
に。

そして、アポロは相手の心に目を向ける。

途端、流れ込んでくるデユフォーの感情。

それは、アポロが未だ経験したことのない、漠然とした——不安。  
心全体を覆い尽くしかねない、薄暗闇の世界。目を凝らしても決して  
晴れ渡ることのない心象風景。

なんだ、これは。

これが人の心なのか。

奈落でも覗いたかと疑るほど、それは暗く深い。希望も愉悦も恐怖  
も悲観も、そこには何一つない。あったとしても、闇とも言うべき不  
安の感情が全てを覆い隠している。生きるのに必要な感情が、何も窺  
えない。



これではまるで、——ただの人形ではないか。

だが、不安の闇の中まで目を向けて、ようやく垣間見えた、心の奥底。そこに隠された秘密とも言うべき事実を目ざとく見つけたアポロは、デュフオーへ真つ向叩きつける。

彼にしてみれば、時間稼ぎになればという足掻きでしかない。それでも、少しでも動揺を見せてくれればと思い、僅かな罪悪感を抱きながらも、目の前の少年にぶつけた。

すると、

「」

一瞬、ほんの一瞬だが、デュフオーの手から力が抜けた。

アポロには何のことかさっぱり分からない。ただ拾ったモノを見せただけで、それが何の意味を示すのかまでは察することはできない。ともあれ拘束の手が緩んだ今こそ好機。振りほどいて魔本に手を伸ばせば届く。そう思った。

だから、

視界が揺らぎ、全身を衝撃が襲った時、アポロは何が起きたのかわからなかった。

(ぐ……っ!?)

鈍い痛みにも目を反射的に閉じる。すぐ傍でパートナーのうめき声が聞こえ、遅ればせながらも、ロップスごと地面に地面に叩きつけられたと知ったアポロは、急いで閉じていた目を開いた。

途端、

視界全てを塗りつぶさんばかりの光が、飛び込んできた。

(な——っ!?)

強い……否、それは、強すぎる光だった。

かつてアポロが最初の術を唱えた時よりも遥かに大きなそれは、強大すぎる心の力を、目の前の少年が持っていることに他ならない。

(な、なんという……強い光だ……!)

思わずその光景に目を奪われてしまう。空へと向かって伸びる光

の柱、それはデュフォーが持つ魔本から放たれている。

未だかつて見たことのない強大な光、そしてそこから感じる注ぎ込まれた力の波動に、アポロの顔から血の気が引いた。

あれは、マズい。

勘が働かずとも、本能で感じ取った。これから放たれようとしている力は、自分にとって未知のものだ。己の持つ最大級呪文など足元にも及ばぬ、敵を跡形もなく抹消するに足る膨大な力。

手元の光に照らされたデュフォーの顔。そこには隠そうとしても隠しきれない、膨大な怒りを、アポロは垣間見た。戦いの最中、人形のように無表情を貫いていた男とは思えない、修羅のような形相。

見てはならないものを垣間見て、触れてはならないモノを踏み抜いた。抗う術さえ失ったアポロは、ただその事実をなんとなく、理解した。

「ジガ——」

デュフォーの口が開く。

死ぬ、とさえアポロは思った。あんなモノを喰らったら死んでしまう。アポロも、ロップスだって。彼らの前に存在するものすべてが、消し飛ぶ。アポロの迂闊な発言のせいで。彼の怒りを買ったせいで。

ごめんよロップス、君を王にすることはできなかつた……爆発寸前の力を目の当たりにして、アポロは自分の迂闊さを後悔した。

だが、

「おいー」

「——ッ！」

意外なことに、ゼオンという魔物が待ったをかけた。

「こんな雑魚相手に何をするつもりだ。無駄な力を使うんじゃない」  
しばしの間逡巡する間が訪れる。

すると、憎悪で彩られたデュフォーの瞳から正気の色が戻っていく。逆立っていた柳眉は下がり、歯を剥かんばかりに強張っていた表情は、再び無のそれへと回帰した。いや、少しばかり動揺しているようにも見える。無感動を貫いていたデュフォーが唯一見せた感情の変化は、本人にとっても予想外だったらしい。

動揺、あるいは驚愕。

いずれにせよ、その隙こそが最後の好機だと、アポロは判断した。

(今なら……！)

取りに行ける、と判断したアポロが走り出す。しかしその直前、何か硬い物体がアポロの顔面に直撃する。

一体何が起きたのか。痛みを覚えつつ仰け反ったアポロが見上げた時、それがデユフォーによって己の本が蹴り飛ばされ、顔にぶち当たったのだと分かった。

派手に尻餅をつく。抱き起こそうとするロックスに何か言ってる時間も、魔本を拾い上げる時間も、残念ながら与えられなかった。

『ラージア・ザケル』！』

轟、と押し寄せる膨大な雷の壁。

放射状に展開された電撃から逃れる術はなく、アポロとロックスは光の中へと消えていく。

「ロックス——」

悲痛な声。後悔と悲観が混ざった青年の叫びは、やがて爆雷と破碎の音へと飲み込まれ、消えた。

## 間章 心に焼かれて

騒ぎを聞きつけ、少女がやって来たときには、既に事態は収束しかかっていた。

見慣れた光景は、そこにはなかった。かつて親友と駆け回った緑の庭も、日が暮れるまで遊び回った草木生い茂る林も。活気溢れる田舎町の一角は、既に過去の良き思い出通りの姿を失っている。

かつて将来を語らった色鮮やかな日々を頭の片隅に留めて、少女は愕然と膝を落とす。

視界に広がるのは、自然の優しさ溢れる緑ではなく、黒と織り交ざる鮮明な赤の色。飛散した赤の色は大地の草を塗りつぶし、天に向かつて伸びる木々は異なる色で覆い尽くされ。穏やかな午後の町並みを跡形も無く壊している。

音が聞こえる。

自然が悲鳴を上げている。

本来あるべき姿を失った見渡す限りの赤い光景に、少女はただただ眼を見張るだけ。

声も出ないとはまさにこのことか。

何が起きたか、何が原因なのか。聡明な彼女の頭からは理屈が消し飛び、やがて真っ先に思い至ったのは、己の半身とも言うべき親友のこと。何よりも大事な人のこと。

どこにいる。

無事なのか。

お願いだから。

一体どこに。

——いた。

探し人は、簡単に見つかった。気が動転していたのだろう、ちよつと目線に移せば、小屋の影にあたる場所で佇んでいた。見た限り怪我はなく、いつも通りの姿だった。どこか呆けたように燃え盛る家屋を眺めているのが少しばかりの違和感が頭の片隅を過ぎしたが、それも自分の住む家がこの有様では仕方ないと判じて、気に留めなかった。親友の方は。

直後、視界にソレが映る。

親友の傍らに、もう一つの影がある。

「——やあ。久しぶりだね」

親友が振り向くよりも早く、少女の存在に気づいたのは、傍らに立つ影——少年だった。

あまり見慣れない背格好の、子供である。初対面、ではない。数週間前から、親友の家で同居していた子供だった。遠い場所からやって来たらしく、行くあてもなく身寄りの無い彼のために、親友は少しの間だけ、自宅での滞在を提案した。少女は反対したものの、親友の強い押しに負け、不安に思いつつも認めたのは記憶に新しい。

外見とは不相応に落ち着き払った言動が印象的で、育ちの良さがなんとなく感じ取れた。言葉遣いも丁寧で、誰とでも分け隔てなく穏やかな物腰で接するため、数日の後には少女も認識を改め、大丈夫だろうと安心していた。

しかし。

目の前のこの惨状を目の当たりにして、普段同様の不敵な笑みを浮かべる少年は、一体何なのか。

湧き上がる不信感に身を任せ、少女は問いただす。一体何が起きたのかと。何を知っているのかと。

「何、彼女が望んだことだよ。私は少しばかり力を貸した。それだけのことさ」

ややズレた答えに、少女はこみ上げる不信任感を隠せない。

ふと。傍らに立っていた親友は、そこで少女の存在に気づいたらしく、少し驚いたように振り向いた。

「……ああ、来ていたのね。ごめんさい、ちよつと呆けていたわ」

振り返った親友の無事な姿に、少女は一度胸を撫で下ろす。だがそれも、親友の浮かべた薄い笑顔を見るまでの間だけだった。

おかしい。

確かに親友は笑っている。けれども、いつもの薄く優しい笑みとどこか違う。

まるで、そう。

さつき生まれただばかりの人形のような——作り物めいた表情に、胸の中の不安が途端に勢力を増す。

「見て。これ、私がやったのよ」

すごいでしょう？ と。

自慢げに語らう親友は、両手を広げる。立ち上る黒煙を背景に、赤く染まる空を抱くように、やはり親友は、心底嬉しそうに言う。相も変わらず、どこか嘘くさい薄っぺらな表情のまま。

開いた口が塞がらないとはこのことか。つい先日まで、将来の夢を樂しげに語ってくれた時の親友の面影など、彼方へと消え去っている。

同じ顔なのに、同じ人なのに。そのはずなのに。

これは、何だ？

少年と、目線が合う。豹変した親友を見てもなお変わらぬ毅然とした態度。少女の驚愕する姿を見て、わずかに深める口の弧。少女はそれを見て直感した。こいつが何かしたんだ——普段ならば到底働かない第六感とでも言うべき感覚が、確信へといざなう。

何をした、と少女は問う。親友はこんなことをする人じゃない、お

前が何かしたんだろうと、半ば確信を抱きつつ怒声を放つ。

案の定、少年はさりと答えた。

「何、ちょっととした手品つてやつでね。少々彼女の精神に仕掛けを用意しただけのことさ」

聞きようによつては、はぐらかすような言い草である。眉をひそめる少女の態度に、ますますおかしそうに少年の口の端が釣り上がるのを、少女は見過ごした。

しかし、と少年は少女の介入を拒絶する。

「ただ、人間というのは君らが考えているよりかは少々複雑でね。闇雲に精神をいじれば良いという話では済まなかつた。我々が持つ本来の力を引き出すには、『心』の力というモノが深く関わっているため、感情を喪失すると途端に精神が生み出す心の力は弱くなる。人格が心の力の強弱を生むという説もあるが、ならば記憶を奪つてはどうか？ と考えた。

しかしそれも否。記憶を奪えばその人物を構築する精神すらも消失する。真つ白な状態、生まれたばかりの赤子同然だ。それではまともにも動くこともままならず、力を引き出す以前の問題だ。

さりとて人格を操作するには少々骨が折れる。何故なら人格の再構築は君が思うほど容易ではない。一度白紙にした上で新たな人格を用意するのは、そうだね、一度完成した芸術品を壊して同じものを作れと言うようなものなのかな？ まあ、いかんせん確実性に欠ける手段である。残念ながらこの案は没となった」

少年は長々と話した後、少女の目を見て僅かな間を置いた。

「残された手段は一つ。……私は彼女の『罪悪感』を取り除いた」

少年は、教鞭を振るつて細かく説いた。

何が悪いのか。何が間違っているのか。

今の彼女には、判断することができない。物事の良し悪しを断定する根底の感情を排除された今、彼女の行動を束縛するモノは何も無い。ブレーキを欠いた列車同様、一度下した決定事項が過ちと思つた

際、足踏みをするのに必要な罪悪感がない以上、踏み込んだ足を引つ込める判断ができない。分からない、のではなく、できないのだ。何故なら、『何故やめるのか』という疑問さえ、差し込むことすらできないのだから。

とはいえ、感情面での否定がなくとも、理性的な否定がある。単純な話である。殺人はいけないことだ、だからしてはいけない。親にそう諭されれば子はその理屈に納得する。倫理的にまずいから、同じ人を殺めるのは法的に禁止されているから。そういつた物事の判断ができない年頃でも、親に幾度も教え込まれば、誰でも否応なしに納得せざるを得ない。

少女は既に自分の中で完成された倫理観、論理的判断基準、常識が存在している。如何に罪悪感を取り除こうと、悪行に対して己の中のロジックと合わないならば、その行為は決行されない。

本来ならば。

それを、

「あとは、私が耳元で囁けば良いだけさ。君は被害者である、君は力を持つ人間である、君はやりたいことをやれば良い。何故なら君は力を持った人間だ。つまり——選ばれし者なのだから、と」

そう囁くだけで、あとはこの有様。迷うその背中を軽く後押しするだけで、ブレーキのないまま坂を転げ落ちていく。

本当に良いの？ と。一度でも迷えばそれで終わり。でもそれはダメなんだと、ストップをかける『何か』が訴えない限り、じゃあやってしまおうとすんなり通ってしまう。論理や理屈が介入するまもなく、下された命令を忠実に実行してしまう。

何故なら、——所詮理屈など、感情を持つ人間が生み出した言い訳にすぎないのだから。

「お分かりかな？ 所詮、人の道理など、軽く息吹きかけるだけでこの程度、脆く儂く砕け散ってしまうものなのさ」



悲しいね。少年は嘲る様に嗤った。人間という生物の有り様を、唾棄するように。

ゆつくりと、少女は友人へと目を向ける。

認められない。彼女は常々己の過酷な境遇に苦しんでいた。人と違う環境、幼い子供に与えられる無残な仕打ち。どうしてどうして、夜な夜な声を押し殺して涙する友の小さく掠れた叫び声を、窓越しに聞くしかできなかった。やがて命さえも投げ出しかけた友に、生きてくれと願い、今まで肩を組み手を取り合って生きてきた。家族よりも強固な絆を感じ、それがいつまでも続いていくのだと思つてた。

思つていた。

思つていたのに。

こんな。

こんなことが。

これが、

これが、やさしかったわたしのともだちなのか。

——否、それは正しい認識だった。

醜悪。少女は眼前で歪に形作られた表情の変化を、心の奥底でただ一言、そう断じていた。本当に人なのか、人であればコレは人間らしい何かを著しく欠如したナニかでしかなく、仮に人で無いとすれば、それは本来ここにあってはいけないモノであり、成る程、それならば、この胸中に渦巻く不気味で不快で気持ちの悪い黒い違和感も和らぐう。

せめて偽者であつてくれと、最後の希望に一縷の望みを託し、見たくもない現実を、今一度、見る。

彼女の顔は、とても晴れやかだった。  
罪の意識から解き放たれ、清らかな笑顔のまま。

熱風が吹き寄せる。

耳元で、何かが無規則に揺れていた。

「あ、」

思考が飛ぶ。空白になった少女の身体から、力が抜ける。目尻に熱がたまってゆき、目の前の景色が僅かに歪む。

そうか。

分かってしまった。

ある意味、そうなのだ。

彼女を救ったのは、私ではなく――

「さようなら。ごめんさいね。けれども私、この幸せな感覚を、手放したくないの」

友は小脇に挟んでいた本を持ち上げる。象形文字の描かれた不思議な本だった。歪み始めた視界の中で、友の手元で本が大きな光を発していた。それが何をもたらすのか少女にはうつすら理解できているが、音も思考も何もかも受け付けず、人形のように地べたに座り込んだまま動かなかつた。

友は何かを言った。

直後、視界を潰さんばかりの爆光が溢れ、圧力の壁が襲いかかる。

「――」

名前を呟く。

最後の声は、少女もろとも砕けて燃えた。

粉塵が、舞っていた。

やがて火柱に飲み込まれ、業火の中へと吸い込まれてゆく。

「……さあ、邪魔者はもういない。もつとも、その邪魔者も塵となって消えたようだ」

少年は、固めていた笑みを消す。立ち昇る新たな爆炎の向こう側をしばし見つめていたが、やがてそれも興味を失い、目を逸らす。

友は肩を下ろすと、小さく息をついた。少年から見る限り、その横顔に憂いの色は一切窺えない。ただ疲れた、という作業の後の一息。それだけである。長年の親友をこの世から消し飛ばしたというのに、罪悪感の欠片さえも抱いていなかった。

御しやすいものだ。少年は内心ほくそ笑む。長々と高説をたれたものの、結局人間も魔物も精神的構造は大差ない。ただ端から見ても如何に滑稽に映るかの差だ。

人間は脆弱である。力もなく能もない。数多存在する生物の頂点に錯覚している愚かな知的生命体。唯一少年が評価できるのは、魔物の力を引き出せるということ、魔物と同程度の知能は持っているということ。その二点だけ。

如何に魔物の力が優れていようとも、引き出す術が無ければ宝の持ち腐れ。忌々しくも引き出す鍵は唯一この人間が持っている。それは認めねばならなかった。

そして、魔物と似た精神構造であるからこそ応用が効いた、精神操作。少年は手のひらを見つめる。かつての世界にいた頃と比べれば力は格段に落ちている。それでも人間の心に細工をする程度、造作もない。子供が粘土をこねるようなもの。想定した形にちよつといじっただけのこと。

所詮こんなものか。少年は、傍らに立つ友の最初の一步とも言うべき展開に、それなりに満足げな息をつく。どうやら思惑通り、罪悪感には綺麗に取り払われている。これなら今後、人間の心情で状況が悪化することはないだろう。良心とやらのせいだ足を引っ張られる、罪悪感に戸惑い力が出せない。容易に想像が付き、少年は肩をすくめた。ふと、思う。

自分はどうだろう。種族が違うとはいえ、同じ生き物。有象無象ではない、これから共に戦っていく唯一無二のパートナーである。同じ心を持った生き物なのだ。自分の都合で精神を操り、望まぬ戦いを強いる。

それに対する罪悪感を、持っているだろうか。

「ククッ」

否、と少年は即座に嘲笑。罪悪感とは、それすなわち罪の意識。己のどこかに存在する良心の呵責が心に生む負荷であり行為に対するブレーキ。脳が叩き出す理論への対抗馬である。

少年とて無情ではない、心ある魔物だ。無残な仕打ちに心を痛めることもあるし、友の境遇に同情したりもした。辛ければ泣くし、嬉しければ笑い、腹を立てれば怒り、楽しいことがあれば胸を躍らせるだろう。行動に行き過ぎた点があるとはいえども、生物の範疇から決して逸脱していない。

心という場所に罪悪感が生じるかといえば、間違いなくイエスである。何故なら感情を持つ生物全てに罪悪感がある。だからこそ躊躇うし、戸惑う。少年は非道と呼ばれる行いに手を染めつつも、やはり一生物である以上、それ相応の感情は持っているのである。

もつとも。

罪悪感はあるても、——抱いてなければ意味はないわけだが。

「さ、いきましよう。これからは自由なの、もつと楽しく生きないかね」

友はサツパリした顔で踵を返した。轟々と燃え盛る我が家に未練はないらしい。一度も振り向く気配なく、その場から立ち退いた。

なんて良い日なのだろう。友は最後に晴れやかな顔で空を仰いだ。夜の帳を引き裂く赤の色に背を向けて、手に持つ本を大事そうに抱えて。ようやく得た自由の感覚に、大事な何かを欠いた心を躍らせる。

もう戻れない。引き返せない道を進み始めた。行き先は地獄の坂の終着か、それとも奈落の底か。

少なくとも、自由な空を見つめる友にとって、気にも留めない瑣末事だった。

「ククク……ああ、今日は本当に良い日だ」

最後に。最後に一度だけ、少年は背後を振り向いた。たった数週間ほどだが、仮宿となった住処が燃えているのを、その目で捉えた。

罪悪感などまったく抱いていない。しかし僅かな間ではあるが、平和ボケした人間の子供と共に生活する体験は、過ぎ去ってみれば思ったほど悪いものでもなかったのかもしれないと、益体の無いことを考える。

それもそのはず。今日という日が訪れるまで、少年は一度たりとも、友の心に手を加えたりしなかったのだから。

「さようなら。君とはどこか違うところで会えるよう願っておくよ。

——ミス・ココ」